国語史学

近世の国語

佐藤鶴吉

國語科學講座

—V—

國語史學

近世の國語

佐藤鶴吉

株式會社
明治書院

國語科學講座

— V —

國語史學

近世の國語

佐藤鶴吉

株式會社
明治書院

目次

近世の國語

——研究史的考察——

佐藤鶴吉

はしがき

「近世の國語」といふ題が自分には課せられたが、こゝに實際書いたのは、近世の國語そのものの研究ではなくて、いはゞ「近世の國語」の研究史になつてしまつた。實は直ちに國語そのものの研究にも入り、その方の材料も相當に整へたのではあるが、さていよ／＼執筆しようと思ふと、先づどうしても、序説として概論的に、一體これまでどれだけ近世の國語が研究されてゐるかを是非あらためて見たくなつたのである。そこで、倉皇として、ほんの序説的に一言して、本論に入らうと思つて執筆しつつ、遂にあやしげな序説で豫定のページ數に達してしまつたわけである。

しかし研究史的ではあるものの、例へば書目の解題的叙述にしても、成るべく抽象的にならぬやうに、多少づつは必ずその書の内容を引用して說き、中にはその引用に連れて、他の文學書の引用をも試み、研究史としては確かに岐

路に入つたやうなことをも敢て之をなしたので、その結果には、やはり「近世の國語」そのものの研究になつてゐるものがあると、自分だけは考へてゐる。

その引例は、讀者の眼に比較的觸れがたいやうな文獻からは多くし、今日の活版本になつてゐるやうなものからは大略にし、或は全然省きもした。引用の程度に精粗があるのは主としてその爲である。

又、引用は、その語、その文そのものが問題でない時は、句讀點や送假名を加へ、假名を漢字に改める程度のことはしたが、假名づかひだけは成るべく原文のまゝにした。近世の文獻の假名づかひは、今日から見ると、むしろ間違つてゐるのが普通であつたからである。

一　近世語とその研究資料の見方

「近世の國語」、略して「近世語」と呼ぶことにするが、その意義・內容は直ちにこれが資料とも關係して來て、必ずしも簡單に定義は下せないと思ふ。國語史にいふ近世期は江戸時代ともいひ、普通の歴史にいふ德川幕府の時代と同じに考へられてゐるが、委しくは足利氏の亡びた天正の初年から慶應の末年まで（二二三三―二五二七）とする學者もある。國語の變遷そのものが大體漸進的であり、又必ずしも政治史と一致するものでない故に、本來なら國語史と政治史とは別箇に時代區劃を考ふべきであるが、今、自分は大まかに謂はゆる江戸時代上下三百年を近世期とする說に從つておく。しかし、この近世期は又享保年代を境として前後二期に分けて見るのが通說である。これを方處的に考へて上方詞・江戸詞などいふのは、主として文運の中心となつた各期の都會地を標準としたものである。さて、こ

の近世全期にわたつて行はれた上方詞も江戸詞も、すべてを含めて「近世語」といふときめてしまへば甚だ簡單であるが、よく考へると、さうわけなくは片附けられない。橋本進吉教授は、この期の口語と文語との變遷を別々に說いて、その口語變遷の資料に關して、

江戸時代には、笑話の書には、古くから口語が混じてゐる（中略）。文學書では元祿頃からの歌舞伎の脚本の類、淨瑠璃、殊に世話淨瑠璃、浮世草子の類、その後興つた、洒落本、滑稽本の類など、皆資料になる。松の葉や松の落葉、淋敷座之慰のやうな歌謠集も參考になる。文學以外のものでは、講義說教又は講演の筆記の類がある。（中略）心學や神道の講釋の書も口語のものが多い。評判記の類には全部口語のものがある。（岩波講座　日本文學「國語學概論」下　六頁）

といひ、この他に、「外國關係のもの」をも數種擧げてゐられる。これは實に要を盡し行き屆いた說で、自分もこれに教へられたところが多い。なほ橋本教授は別に文語の變遷を說き、その各文體の種類によつて、又その時代の各材料のことに言及してゐられる（岩波講座「國語學概論」下　第九章「日本の文語」六〇—一頁、六七頁、六九頁）。しかし、漢文・歌文・書簡文の如き特殊のものを除いて、江戸時代に最も廣く大衆的に行はれ、そして、やがて明治以後の普通文（文章體、口語體ではない）となつた謂はゆる假名交り文、卽ち當時の多くの小說類及び隨筆雜記に用ひられた文章の中には、やはり當時の俗語や口語の語法が混入してゐること、亦同教授の說かれてゐる通りである。文章語體の作品、例へば初期における假名草子のうち、「可笑記」「伽婢子」の如き、後期においては、馬琴・京傳の讀本の如きにしても、純正な文章體の用語のみから成つてゐるのではない。

翻つて口語の資料のことを考へて見ると、すでに文字に寫したものである以上、その口語は如何なる程度まで實際

の口頭語を表記しえてゐるかゞ問題である。文獻の種類・性質によつてもその表記の精確さが異なり、又、一概に近世期とは言ふものの、細く考へれば各の制作時期によつても表記の精確さを異にする。對話を口語に、地の文を文語にするといふ方針で書かれたらしい文獻でも、なかなかその方針は徹底してゐないのが實際である。例へば近世としては末期に出た柳亭種彥の「田舍源氏」の如きものに至つてすらも、仔細に檢討すれば、決してその方針が十分に守られてはゐない。（△點は文語、○點は口語。筆者が加へたもの）

「ああこれ高い、靜にしや。なるほどおまへへ出づるには、此渡殿より外にはない。あちらは杉戶、こちらは唐戶、ついでのことにかうして」とひそひそ聲に晝顏が、言含めるを二人の女、にこにこ顏にうちうなづき、その用意をぞしたりける。（初篇、上）

の一節に見ても、對話に文語があり、地の文に口語がある。女の言葉として「御機嫌よう」の如き、全く今日と同じ調子に使はせてゐるかと思ふと、「わたくし事は村荻とて、喜代之助が娘にてはんべるなり」などと言はせてもゐる。この一戲作からすべてを推すわけではないが、口語の資料と文語の資料とをわけて見るには、とにかくかう言ふ點をも考慮に入れることが必要である。研究の便宜上、兩者を區別して取りかゝることは大切なことであるが、これは大體の上から言はれることであつて、實際の資料に當つて見ると、殊に文章語體の資料の中には、口語・文語の混淆が多いと思はれる。前記「田舍源氏」の執筆態度には尙論ずべき點があると考へられるので姑く措き、全く其時期の口頭語を直寫して、大衆又は婦女子向きに書かれたと謂はれる材料にすらも、隨分硬い・ぎごちないと思はれる處がある。それは、一つはその當時の表記法そのものが不完全なためでもあらうが、その假名のまゝに讀んでは、時代の差異を

考慮に入れても、どうしても口語體らしく感ぜられない部分がある。例へば、「おあん物語」（この書は、書誌學的には疑問の餘地があると思ふが、近世に入つて口語で書かれたものとしては古いものであるといふのでよく例に引かれる）などに、

そのところへ。おとな來て。敵かげなく。しさりました。もはや。おさわぎなされな。しづまり給へ〳〵といふ所へ、鐵砲玉が來りて。われらがおとゝ。十四歳になりしものに。あたりて。そのまゝ。ひり〳〵として。死でおじやつた。

といふ調子で書いてあるが、「來つて」と「來りて」と兩者ともに口語であつたのか。「死でおじやつた」かやうに、撥音をも促音をも一方に表記してゐながら、他方に「なりしものに、あたりて」といふ如きはそのまゝ口語と見てよいか。この種の例は、「昨日は今日の物語」や、「戲言養氣集」などの中での、口語調の最も著しく表はされたと思はれる部分（この二書は、橋本教授も示してゐられるやうに、口語が混じてゐる程度のものであるが、節によつては全く口語調のところもある）についても擧げることが出來よう。一體に文學書では、殊に初期のものについて言へば、作者當時の生きた口語をたよりとするよりは、前代からの文獻による文章語（古くは平安朝の物語、鎌倉室町期の和漢混淆文、謠曲等の用語）をたよりとして書き綴つたものが大部分を占めてゐることは勿論であるが、その口頭語のまゝを記錄したと見られるものも、室町期の狂言記などの用語を襲用してゐるものが多いのではないかと思はれる。それで實際の口頭語を直寫しようとしたものは、享保年代を降り、寶曆頃以後に入つて出來た洒落本、滑稽本、作者で言へば、京傳・三馬・一九などであらう。そのうちにさへも、地の文はとかく文語的のものが多い。まして、近世初期の京阪中心の文學語の中から、當時の純粹の口語を選りわけるのは、思つたよりも困難な仕事である。殊に、前にも言つた

やうに、口語調の中に突然出て來る「ありた」「給ひた」の如き例は、實際にどう讀んだのであるか。音便發達の歴史から考へれば、當然「あつた」「給うた」と言つたのであらうにと、この種の表記法にいつも自分は疑ひを持つ。これについて、後に再說しようと思ふ「片言」卷四に、

一 短冊な。たんざく。但かんなにてたんざくと書て。口に唱ふる時にはたんじやくよしと云り。枇杷阿闍梨のよふやうのごとし

一 蓬な。ふもぎ

一 萌黄な。もえぎ

此二つかんなにはふもぎもえぎと書て。口に唱ふる時は。よもぎもよぎと云べしとかや。

とあるのが思ひあはされる。これは名詞の語彙についてのみ斯うであつたか。「ありた」「給ひた」の如き動詞と助動詞との接續、卽ち語法的事實の上にもさうであつたか。例の「借りた」「買つた」が東京地方の語で、「借つた」「買うた」が京阪語と、今日も區別されてゐる點などから推すと、上の如き例を表記法の不完全から生じたとばかり考へるわけには行かないと思ふ。この問題については、後章「一步」（一名、手爾波道）を論ずる際に再び觸れるであらう。

更に近世語を語彙的に見ると、これを文語と口語とにわけることは、ます／＼困難になつて來る。今日の日常語でも然るやうに、語彙的には實際兩者の差別がなかつたものも多いと思はれるので、自分は自分の現在の研究進度から考へて、甚だ獨斷的であるけれども、「近世語」といふものを、語法的にも語彙的にも、殊更に口語と文語とに分類することなしに、兩者に通じて、

一、近世になつて言ひはじめられたことば。
二、形は古來のまゝで、意義の變つて來たことば。
三、意義は古來のまゝで、形の變つて來たことば。
四、起源は古いが、形も意義も變つて來たことば。
五、形も意義も古來のまゝながら、殊に近世に盛んに用ひられたことば。

といふ風に考へて見たい。柳田國男氏は、「近世に入つてから、急に形の改造された物の名が幾つとなくあるだらう」(方言、三ノ三、「蟻方言の變化」8頁十行目)と言つてゐられるが、物の名に限らず、他の品詞に於ても、さう見られるものがあるだらうと思ふ。同氏も同じ論文に、

不味のモミナイがもとは「うまうも無い」であり、醜いのミツトモナイが實は「見たうも無い」であることだけは、此頃になつて全く判然したやうだが、近世の動詞にも斯うして出來た成句語とも謂ふべきものが多い云々――。(方言、三ノ三、「蟻方言の變化」7頁の二行目以下)

と言つてゐられるのみならず、更に、

今日吾々の持つてゐる言葉に表はれた大部分――どの位までとはつきり云へないが――江戸時代以後に作つたものであります。(方言誌、第七輯「何の爲に方言を集めるか」9頁十二行目以下)

とまで說いてゐられる。その「改造され」、「作られた」ことばが、實際にどんな種類のものか、それは近世のいつ頃の產出・改造であるかを一々明かにすることが、卽ち近世國語史の一つの大きな仕事でなければならぬ。さうすると、

文語・口語の差別なしに考へるとは言つたが、結局はやはり主として口語の變遷を考へることになることは爭はれない。從つて又近世語の研究が、方言研究と切つても切れぬ關係になつて來ることも當然であらう（しかし、本篇では後章の研究史的考察に於ても、いはゆる方言書には「片言」以外觸れないことにした。）

さて江戸時代の學者乃至文筆者流は、今日吾々が以上の意味でいふ「近世語」を何と呼んでゐたか。この事をいさゝか考へてこの章を結びたいと思ふ。最も普通には今日までも生きてゐる如く「俗言」と稱されてゐた。これを國語學者は殊に「さとびことば」と言つて、「雅語」卽「みやびことば」の對語としてゐた。（但し儒家・醫者は、それぐ〵佛語・漢語の對語としてゐた）。更に一般には「俗言」「俚言」「平語」「ひらことば」「世話」「諺」「方言」「かたこと」（片言）などとも稱したが、そのうちで、「世話」「諺」は、殊に成語・成句的のものを言つて、遂に今日の狹義の「ことわざ」を意味するやうになつた。また「方言」と「片言」とは當時から少し意味が局してゐて、特に「なまり」「くにことば」「訛語」「鄕談」等の類語とされてゐたと見られる。漢籍・佛書にいふ「方言」「俗語」は、漢語・佛語に對して日本的の熟語を稱したものであるが、こゝに一つ面白いのは、「方言」の文字を、十返舍一九が戲作の名に「方言修行」（文化十二年作）など用ひてゐることである。一九に取つて「方言」は「むだ」と考へられたやうに、近世期ではこの俗語・方言が、如何に賤しまれたかは次章に入つて改めて言ふつもりであるが、なほ一つ式亭三馬の例を引かう。

「なんのだらしもねえくせに」。（しだらがないといふ事を、「だらし」がない、「きせる」を「せるき」などいふたぐひ、下俗の方言也。）

これは「浮世床」（初篇の上）に出てゐるが、括弧の註が三馬の言葉として特に注意される。「しだら」と「だらし」、「き

せる」と「せるき」、これらは自然の音韻錯置であつたか、或は當時の謂はゆる「逆詞」「いるまやう」であつたかは研究の餘地があらうが、とにかく「下俗の方言」として三馬には睨まれたのであつた。

「口語」といふ熟語は今日普通になつたが、この語の使ひはじめは何時頃であらうか。書名の上には有賀長伯の「以敬齋口語聞書」などが古い方かと思ふ。谷川士清の「和訓栞」(首卷は、安永六年九月刊)の大綱には、

(1) 文章と口語とのわかちは聖武紀に文則皇大夫人、語則大御祖と見えたるが如き是也。

(2) 詠歌大概に詞は三代集に出べからずといへり。されど古今集の詞といへども好みよむまじきともいへり。口語も又同じきにや。

(3) 讀書口語ともに漢呉は勿論、清濁も音便の宜しきに從ふべし。

など用ひてあり、その意味するところ三者必ずしも全く同義でないが、これらの「口語」を「俗語」といひかへても、大なる變りはないやうに思ふ。尤も士清は別に、「我邦の語」に「雅語あり俗語あり」といひ、更に雅語を「讀書詞」と「詠歌詞」とに分ち、又、俗語を、「官府詞」と「叢林詞」とにわけて說いてゐる。右の例に、「讀書口語ともに」と言つたのは、讀書詞と口語とを對せしめたのである。そして、俗語の中の「叢林詞」が、或は事實に於て今日の所謂口語を意味してゐるかと思ふが、とにかく士清の用例は上の通りである。この外には、後にいふが如く、「嬉遊笑覽」の著者喜多村節信が「口語」といふ語を用ひて居り、それは「和訓栞」の用例に示唆を受けたらしいが、その意味は全くすでに今日いふ「口語」と同じになつてゐる。漢籍用語としての「口語」は、單に「物いふこと」と解されてゐるが、近世の文獻中にその意味に用ひられた例はまだ管見に入らない。

二　資料の見方（ツヾキ）―研究史的考察

1　近世語研究の不振

以上いふところの近世語に對して、近世當時の學者（敢て國語學者とは限らぬ）は、如何なる關心をもつてゐたのであらうか。これが又一つの問題であつて、この事を委しく研めれば則ち近世語研究史が成立するわけである。そしてこの研究史は、苟くも近世語を研究する者の先づ心得てゐなければならぬことであるが、遺憾なことには、曾て國語調査委員會の「口語法別記」の編者が、「口語ノ變遷、語原等ニ就キテ、江戸時代ヨリ、明治大正ノ今日ニ至ルマデ、學者ノ已ニ研究シタルアルカ知ラネド、編者ハ、遍クコレヲ索メテ、遂ニ一書ヲモ手ニシ得ザリキ。蓋シ、着目セシ人ハ無カルベシ。畢竟、國語學者ハ、口語ヲバ一概ニ俗語ト擯斥シテ顧ミザルナリ。（敷田年治ノ假名遣沿革考アレド、假名遣ノ事ノミ、）」と例言に記された通りであつて、今、こゝに近世語を近世當時の學者が如何に研究してゐたかを探るのは、そもそも當時の學界の事情を考へない試みとも謂はれるであらう。その俗語・口語の材料に富むといふ故を以て、今日吾々が好んで取扱はうとする淨瑠璃文學に對して、國語學者ではないが國文學にも十分理會をもつてゐたらしい太宰春臺は、物言はねば腹ふくるゝといふ動機で物した「獨語」の中に、「その詞の鄙俚猥褻なること云ふばかりなし、士大夫の聞くべきことにあらざるは云ふに及ばず」と言つて、果ては淨瑠璃興行禁止論まで唱へてゐる。尤もその禁止論を立てたのは、必ずしも淨瑠璃に用ひられた文章言語そのもののみに關したことではないから、姑く措くとするも、「源氏物語評釋」で名高い萩原廣道が、その著「小夜時雨」に於て、初學の歌よみが、近世の軍記或

は謠曲または淨瑠璃などの詞に賴つて歌を詠むことを「いとかたはらいたく心ぐるしきもの」とし、

さるは謠淨瑠璃やうの物は大方誰も〳〵知りたる故に、おのづから其詞のうつりて自らも心つかぬなるべし。さはいへど、かの謠淨瑠璃の中なる詞どもゝ、元は歌物語の草子どもよりこゝかしこ摘み出たるなれば、さるくだりは皆がら俗語にもあらざれど、既にさる物の詞となりては、普く世の人の耳なれたる事なるを、さながらにもていづれは、さは何の謠何の淨瑠璃よとうち見きくよりふと悟られて拙くをこがましく聞ゆるなり。またその謠淨瑠璃の作者どもの拙くて、本歌本語を引たがへなどしたる類もあれば、必ずさるみだりがはしき物をほんとはすまじきなり。さらぬだにをさなきだにといひ、名のみしてを名のみにてといひ、いつしかとをいつしかにといひ、いとゞしくをいとゞ猶またはいとどさへといひ、言を夕にいひかけ、うきみしづみゝをうきぬしづぬなどいふたぐひ皆是なり、なずらへて知るべし（「軍記、謠、淨瑠璃の詞」の條）

と言つてゐるのを見ると、淨瑠璃、溯つては謠曲・軍記の類が如何に當時の人々の頭に浸潤し、又歌人の用語にまで影響を與へてゐたかの事情も窺はれて面白いが、これによつて又淨瑠璃などの詞を如何に國語學者が考へてゐたかの一端が想見せられ、俗語研究などの起る筈がなかつたことも知られるのである。伊勢貞丈は後にいふやうに、とにかく、この俗語にも注意して、その研究史上からも敬すべき學者であつたと思ふが、その「安齋隨筆」に於て、シンマクといふ俗語の語源をば「續沙石集」（寛保三年、僧南溟著）といふ書によつて解し得たことを記して、

これにて俗語のシンマクの二字始めて心付たり、近年の人の著したる書なりとも、書をば見るべきものなり、不慮に知見を開く事あり、愼莫の二字古よりある詞なり（故實叢書本、卷二十二、七四三頁）

と言つてゐる。これは學者として嬉しい一つの感想であつたに相違ないが、一般に當時の國學者は、尙古趣味にとら

はれてゐて、當時を研究し、又近く著された書物などを深く顧みることをしなかつたのである。これは故實家の貞丈のみでなく、當時の國語學そのものが、古學であつたのであるからやむを得ない。

然らば、近世語研究の史的考察に資すべき材料は全くないかと言ふに、決してさうではない。前記「日語法別記」の說もさることながら、それは主として語法研究の立場から見られたことである。故に研究者の目の向け方、心の注ぎ方によつては、求めて求められるものが多少はあるのではないかと思ふ。自分は敢て研究史といふほどのものを述べようとするのではないが、唯順序として、この事の必要を感じたので、今日、心づいてゐる事項だけを記して見ようと思ふのである。

先づ大體の觀察からいふと、音韻及び語法に關しては、如何にも研究史の資材とすべきものが管見に入らないのであるが、これに比すれば、語彙に關する研究と文獻とは、相當に存することと思ふ。これは、音韻及び語法の方が比較的に固定的であり、その變化も漸進的であるのに對して、語彙の方が、その變遷が目立ちやすく、或はその意義に於て形に於て、種類に於て數量に於て、社會事情の變化に伴つての變動出入・新陳代謝が、遙かに著しい、といふ言語そのものの根本的性質が、研究者の心を支配して然らしめた結果であると考へられる。が、その研究・關心の偏した理由はともかくとして、以下、大體年代を追うて、近世語研究に觸れてゐる文獻と人とについて、筆を進めて見ようと思ふ。

2　國語學史から見た俚言

近世期の學者が、自己眼前の俗語に注意し、多少なりとも關心をもつた方面は、前述のやうに、先づ主として語彙

であつた。そして、その始めを成したものは、謂はゆる國語學者でなくて俳諧者流であつた。文獻から言へば、國語學書ではなくて俳書といはれるものであつた。俳諧と國語學との關係は、從來餘り注意されなかつたやうであるが、自分は、最近、新潮社版藤村作博士編の「日本文學大辭典」に於て、橋本教授の執筆された「國語學」の項の一節で、この事に言及してあるのを見て、從來この我が意を、いよいよ強めたのであつた。さて、第一に擧ぐべきは、松永貞德であるが、彼の俳諧用語に關する平生の教導は、その弟子達をして、俗語に關する數種の著述を成さしめたと解せられる。

1 俳諧初學抄（寛永十八年刊、齋藤德元）

2 はなひ草（寛永二十年刊、或は云ふ寛永十三年刊、野々口立圃）

3 毛吹草（正保二年、松江重頼）

4 言葉寄（刊年不詳、野々口立圃）

5 片言（慶安三年、安原貞室）

この外、慶安三年、山本西武の著「久流流」、その他にも何あらうが、今は管見に及んだものをこゝに擧げるに止める。

これら、殊に123は俳書と稱せられるもので、純然たる國語研究の書と目すべきものではないが、その各が採錄してゐる俳諧用語に對する選擇意識は、一方では規範的に國語教育的に進みながら、他方ではやがて研究的・國語史的に進むべき素地をも成してゐると見られる。殊に語彙研究の立場から見れば、彼等の「いろは詞」（いろは順に並べた詞）や「季寄せ」といふものは、即ち一種の特殊辭書とも稱するに足りるものである。俳諧用語、以下略して俳言と

呼ぶことにするが、それの選擇が何故に俗語研究と關係あるかと言へば、「俳諧初學抄」に次の如く說いてゐるのを見ても明かである。

俳諧にには連歌の德の外に五つまさりたるたのしみ侍るとかや……第一に俗語を用ふる事

といひ、更に

俗語不レ苦と申ながら、あまり道外過たる詞は如何、縱ば、此方へ御座れ、いやで候、是非ともおぢやれ、御座らせられぬ、御月様、御日待、蟲ほえて、鶯なくゝり付、かやうのふつゝかなる詞は不レ可レ書。

など言つてゐるのは、卽ち貞門一派の俳言觀の一端を語るものであり、またその俳言と當時の一般俗語との差別についても、一の標準を考へてゐるものと見られる。なほ同書の「四季の詞幷戀の詞」の部は、全卷の大部を占めてをり、これが又、今日の目を以てすれば、當時の俗語の語彙と見られる。殊に「戀の詞」として集められた語彙には、やがて勃興して來る浮世草子などの用語と相一致するものがあるので、早速に辭書的に役立つのである。初學抄に限つたことではないが、例へば、「ゆひ入」「辻立」「門立」「坊主おとし」「股つく」など、「戀の詞」の中に見える語彙は、卽ち浮世草子の語彙でもある。例の「一代男」卷三の「袖の海の肴賣」の章の冒頭にある「火の當」といふ一語は、曾て難解語として學者を苦しめたが、實はこの初學抄の四季の詞の「中秋」の部に既に註されてゐるのである。

「はなひ草」は刊行年次からいふと、或は初學抄より五年早い寬永十三年が正しい(「俳句講座」、第六卷俳諧解說篇、宇田久氏の說)らしいが、說述の便宜もあつて初學抄の次に言ふわけである。「こゝに連歌のたゞことを俳諧といひて、顯ふに古ることの跡をも思はず、今やうのよしなしごとを口にまかせていひちらす有」と序して、用語のことに

先づ言及してゐるが、本文は最初から俳言をいろは順に分けて、一々俳諧用語としての註を施し、次に十八項の式目作法を述べて、終に「四季の詞」を擧げてゐる。その俳言をいろは分けにした處が、辭書的であつて注意に價するが、これは直接には、木食上人の「無言抄」の「いろは詞」に學んだと思はれ、間接には、「伊呂波字類抄」「節用集」などの語學書が、俳書の方へ影響した結果とも見ることが出來よう。ともかく、この「はなひ草」の編纂法が使用に便利であつた爲に、當時非常によく行はれたことは、諸書に引用されてゐる事實と、その後、本書の增補改訂されたものが幾種か現はれてゐる事實とに徴して明かである。今、その增訂本の一つである延寶四年刊の「はなひ草大全」を見ると、「夜分の詞」の中に、「日待」「またね」「いびき」など、六十種ほどの語があげてある。が、その「日待」は、初學抄に「御日待」とあつて、用ひてはならぬ筈の語であつた。又「戀の詞」は初學抄には八十餘あげてあるが、この大全では百八十あまりに增加してゐる。これら採擇語彙の出入增加狀態について、この種の各俳書を比較討究することは語彙史の上からも面白いことであらう。

「毛吹草」も「はなひ草」と同じやうに、「あらゆる俗語に至るまで大方共嫌ひなく廣く云出ける」俳諧の德義について序し、俳諧は和歌に入る友となるものだといふ師說を奉じながらも、俗語採用には一層自由な考を持つてゐたらしく、「世話の詞は俳言の種にもならんやいなや、あらぬ事まで拾集」めたと言つて、當時の諺を多く集めてゐる。卷一は主として式目の事。卷二は四季の詞、季に非ざる詞、戀の詞、世話付古語。卷三は、いろは別の一語々々に聯想的用語を列擧した語彙。卷四は諸國土產物の名。卷五六は四季の發句。卷七は附句。この中で語學的に最も見るべきは卷二で、殊にその「世話」の採錄は本書の特色で、本書が後世の辭書類に屢々引用されてゐるのはこの點からである。

又、「戀の詞」を俳諧と連歌とにわけて擧げてゐるのも、初學抄や「はなひ草」のまだ試みてゐない處で、これによつて吾々は當時の俳人の語感を窺ふことが出來る。例へば、「しんき」「らうさい」「小ゆび切」「古算」「十五日歸」「千も
ち見」「誓文の類」「二度びくり」「杯の付ざし」「念者」「鬼も十八」の類は、俳諧の戀の詞で、「きぬ〴〵」「えにし」「むつごと」「そひぶし」の類は連歌のそれであるといふ。「世話」をば、「みやこは目はづかし、ゐなかは口はづかし」「三寸の見なをし、百くはんのおもにもたり」「爪に火をともす、けしを千にわるごとし」「あざみに鯉、やぶに剛のもの」といふやうに、二つづつ對句的に擧げてゐるのが多いが、又、一句づつ獨立させても記してゐる。更に單語或は成語として、「地ごく耳」「まんがち」「ほめくさ」「一はなかくる」「うれしかなし」「人しげなし」「へんてつもなき」「とでもなき」などの類を擧げてゐる。その諸國古今の名物（卷四）の處は、百科事典的で便利である。西鶴用語で自分が久しく問題にしてゐた「祇園箒」は、曾て藤井乙男先生の示教のやうに、本卷の山城の部に「祇園風車、夢箒（シンハヽキ）」とあるものである。「世のほめくさ靡き」といふ修辭も浮世草子でよく接するが、上の例で「ほめくさ」は當時の流行語であつたことがわかる。かくして、「毛吹草」は俳書としての價値はともかく、近世語の研究書或は研究資料として大切なものである。

「言葉寄（ことばよせ）」（刊行年次不詳）は、「はなひ草」の著者立圃の撰であるが「はなひ草」より後の撰か先の撰かわからない。内題に「言葉よせ」とあつて序はなく・直ちに本文となつて、いろは順に語彙を集めてゐる。すでに「國語學書目解題」の補遺の部にも出てゐるやうに、本書は純然たる國語辭書であるが、刊行はされたものの未定稿でゞもあつたか、その語彙には何も語釋がない例もある。そして如何なる標準・目的があつて撰まれたかも判然としない。前記解題には

「蓋、連歌、俳諧などの爲になしたるなり」とあるが、その語彙の內には中古の語彙もあり、その訛語もあり、又當時だけに用ひられた俗語らしいものもある。そしてその語釋には、撰者一人の考か、當時一般の考か知らぬが、往々誤りも見える。例へば「いきぶれ」「いく藥」「ろなう」などは中古以來の語で問題なしだが「いひすし　言役つよく云也」とある如きは「いひそす」といふ中古語の訛りと見える。「いゑとうじ　家童妻　主人女」とあるは、家刀自(いへとうじ)と同語であるが、註の「家童妻」の文字は、或は「いわらじ」「いはうじ」などの近世語の語源說に參考となりはしないか。「はぢかはし　たがいにはづる也」の語釋は誤で、「いでそよ人　足當人」とあるは語釋そのものが自分には解せない。その外「いぬき　犬公　おさなき人の心也」「鬼しうて　をそろしき人也」「すかゐ　猪也」など珍しく、「してゝ　しづかにと云詞也」「ぼきたる　模規　ほれたる也　めづらしき也」「とぢめん　とゞまる事」などは何れも誤りで、次に說く「片言」の中にでも入れたい例である。「二のまち　次といふ心也」とある例は、「物之本江戸作者部類」(天保五年、蟹行散人)の「浮世風呂」を評する處に、「さはれ皆膝栗毛の二の町にして等類を離れがたかり」などあり、自分は江戸末期に言ひ始められた俗語かと思つてゐたので一寸案外であつた。以上は本書一瞥の際自分のノートしておいた語彙の一部の發表である。仔細に見れば本書には更に語彙研究、俗語の語源解釋に資すべきものがあるであらう。

「片言」は夙く赤堀氏の「國語學書目解題」に紹介され、又最近「日本古典全集」(第四期)に收められ、新村出先生の委しい親切な解題が添へてあるので、こゝに蛇足を加へる必要もないが、自分は自分として師說に導かれつゝ、いさゝか愚見を書きつけるのである。第一に前記「言葉寄」との國語學史的關係の有無であるが、同書には刊行年次がないの

で、制作について本書との先後はわからない。思ふに安原貞室も立圃も貞徳同門で年齢も略々ついてゐたので、お互に同時に獨立にかゝる企てをしたものか。或は既に寛永十三年（又は、同二十年）に、「はなひ草」を著して、而もその書がよく世に行はれたので、それに勢を得て「言葉寄」をも續いて起稿したものか。すると、兩者は互に相關係するなしとしても、企てとしては「片言」よりは「言葉寄」の方が先ではなかつたかと思はれる。何にしても、これは臆測に止まるが、この「片言」の刊行された翌年の慶安四年に、貞徳の「御傘」（自分はこの書をも語學的に見たい、後述）が出てゐるので、當時この種の語彙を扱つた俳書の出版される機運が盛んであつたと思はれる。その中で「片言」は實に新村先生の謂はれる通りに、國語學史上の一異色をなすものとして現はれた。卷一の筆頭に、「冥加ない」と「如在ない」とが問題とされ、結局、その「ない」は「無ノ字の義にあらず」と斷じてゐる。これは後の國語學者も問題としたが、實は夙く本書が解決してゐるのである。各卷大體が規範的記述であるとは謂はれるものの、「何々を何々」といふ如く、正訛兩者を並記して行く中には、或は音韻學上に、或は語源學上に、或は語法上に、或は語構成論上に、趣味多い無數の資料を發見し得べく、卷五の「ちいさき物。ちんまり。ちよつぽり」と書き出して、五六十の擬聲語、擬態語をあげた後に、「右五六十のこと葉は、大方音響をもて頓而（やがて）唱ふる歟。皆推しはかりの注なれば誤のみ成るべし。よく心得ていふべき歟。此等のうち、濁れる言葉はいやしう聞え、すめるはやさしう覺え侍るなり。但すめるも事により侍るべし。」などと說いてゐるところは、イェスペルゼンの音響語說、音象徵論など想はせるものがあつて、自分が殊に興深く感ずる處である。「いはずしてもこと闕（かき）侍るまじ」といふ語は卷一にも擧げてあるが、卷五に至つて更に三十項餘りを擧げてゐる。これらを見ると、同じ俳人ながら、その著作の目的態度が異なつてゐた結果とはいへ、「毛吹草」の

重複などとけ俗語に對する批判・見識が甚だ違つてゐたやうにも思はれる。なほ、本書は卷三の途中から部門をわけて語彙を整へてゐるのは、節用集などの分類に倣つたと思はれるが、これを「言葉寄」のやうに、「いろはわけ」に仕立てたならば面白い俗語辭典が出來るわけである。片言とはいふものの、要するに京都言葉の訛りであるので、その後の上方文學語とも密接の關係を有し、本書の語學的價値はその點からも極めて大きいものがある。

尙、本書が當時に相當に知られたことは、潁原退藏氏の論考（書物展望、第二卷第十一號「片言と通言便蒙抄の僞版」）や新村先生の解題增補で明かであり、又、「何々大和言葉」といふものが、本書の模倣書として表はれてゐることも、最近二三學者の論じてゐる通りであるが、更に管見に及んだ處を附記するならば、「世話重寶記」や「諺草」の前に第一に「通言便蒙抄」（天和二年刊）に引用されてゐることである。尤も便蒙抄では、「片言」といふ書名を舉げたところは、臍卷に、

種々砂多（シユシユサタ）　此詞いかに書べきや出所分明ならず、かたことゝ云書には種々砂多と云を後誤りて種々さつたとつめるやといへり

砂多とは砂（イサゴ）のごとく多きをいふ義なるべし

とある條だけに心づいたに過ぎないが、その採錄してゐる語彙のかれこれに、「片言」にあげられたのと同語彙が相當に指摘し得るのである（便蒙抄については後に再說する）。降つて伊勢貞丈の隨筆雜記に問題とされてゐる俗語のうち「片言」に據り、或は之にヒントを受けて記したと思はれるものがこれ又可なり多い。尤も貞丈も「片言」の書名を言はないが、「片言」の語彙と貞丈の舉げてゐる俗語とを索引にして兩者を比べたならば、思ひ半ばに過ぎるものがあらう。なほ、大田南畝の「一話一言」卷八に、「或書の中に（題號不見）」として、丁度二十條ばかり摘記し、一二「覃安」と

いふ註をも加へてゐるものは、全く「片言」の拔萃であり、後に、書名の「片言」に氣づいたことまで正直に附記してゐる。更に面白いのは、山東京傳作の黄表紙「和荘兵衛後日話」（寛政九年刊）に、この「片言」を利用したのではないかと思はれる一節がある。少し長いが、これも研究の一資料と見られるし、それに同書には未だ飜刻本もないやうであるから、玆に引用して見よう。先づ主人公和荘兵衛が、「愚直國」といふ國に行くと、その國の言葉が他國と違ふことが多いと言つて、その例を「雲泥萬里のちがひといふことを、うんてんばんてんのちがひといひ」と書き起し、以下全くこの「片言」の筆法に倣つて、「燈臺下暗を、とうざいもとくらし」「我家樂の釜たらひを、わかいへらくのかなたらひ」「南天をなるてん」「紅粉をべね」「牙をきんば」「狸をたのき」「鳶をとんび」「昨日をきんにやう」「きものをきりもの」「草履をじやうり」「夷をゑべす」「福ろく壽を、ほくろくじん」「さんごじゆをさんごじ」「呂律のわからぬを、ゑれつがまはらぬ」「棕櫚はゝきを、しろはうき」「手裏劍をしりけん」といふ例をあげ、「そのほか數へつくしがたし」と結んでゐる。そして和荘兵衛は或時改めてその國人を集めて話をするが、その中に、

南天をなるてんといひ、手裏劍をしりけんといふ類のかたことは、書物を學ぶことなく、字義に暗きが故なり、抑も幼き時、先づ初めおしゆるに、てうち〳〵あはゝ、あたまてん〳〵といふは、丁丁といふこと木をきるおとおとなり、あはゝといふはあうん（阿吽）の義なり、あたまてん〳〵といふは、上は天なりといふ義なり、これ天地人の三才をもつておしへの始めとす

云々

と言つてゐる。「なるてん」は「片言」には見あたらないが、「しりけん」はある。「ほくろくじん」も「ほくろくじ」と出てゐる。暗合といふこともあらうが、慶安三年の書に出た「片言」の一書が、百五十年後の京傳の戲作にまで光を投げ

かけてゐるといふことは、この書が一つは讀んで面白いことにも因るのであらう。尙、「當字片言指南所」といふ黄表紙が、櫻川杜芳作、北尾政演即ち京傳の畫で出てゐる。これも片言と當字とを材料にした戲作であるが、さまではとここには引用を見合せておく。

「俳諧御傘」(慶安四年、松永貞德)は、勿論俳書である。が、俳書としての「御傘」をこゝに說かうとするのではない。自分は之を語感の記錄として見たいのである。語義を錄してゐるものは辭書である。けれども語義と共に國語學で考へて見なければならぬものは語感である。たゞ語感は久しい間の經驗によつて吾々に自然に發達して來た言語に對する感じであるが故に、これは理智を超越し分析を許さない(安藤正次氏著「國語學通考」二一八―九)ものである。從つて之を記錄することも語義の如く容易でない。否、嚴密に言へば語感の記錄は不可能である。然るに俳諧式目の書は、間接ながらこれを試みてゐると見られる。何となれば、俳諧で「指合」「去嫌」など言つて用語を選擇してゐるのは、畢竟この語感に基づくものではないか。俳諧の式目は根本的にいふと、この語感、語感に伴ふ聯想に基づいて制定されたものであらう。然らば「御傘」のみが語感の記錄ではない。俳諧の式目を記したものは皆さうである。前述した「はなひ草」も「毛吹草」もさうである。更に溯つて連歌の式目がさうである。けれども「御傘」は、その最も懇切な委曲を盡したものとは見られないであらうか。俳言をいろは別として、その一々に俳諧の式目に基づいた註記が施してある。その註記は又語釋・語源說とも關聯してゐる。何となれば、ある語彙について去嫌を說くことは、即ち一方にその語彙との類語を考へることでもあるからである。例へば「たゞふる」について、これは旣に「無言抄」にもあるが、「御傘」には、

たどる　に尋、二句去也、但、道などたどるは尋心也、思ひにたどる、學びにたどるなどには、尋心なければ嫌ふべからずと

いへども云々

と說いてゐるのは、「たどる」「たづぬる」の兩語に對する語釋に觸れ、又「たどーる」と「たづーぬ」とを比較せしめ、「たど」と「たづ」との同語根であることをも考へさせるに至らないであらうか。或は「けらし」や「らん」などの助動詞についても、語法的には說明してゐないが、その實際の用法に資する爲に說いてゐるところから、間接にそれらの語の語感といふものが察せられる。自分も未だこの見地から精しく檢討したのではないので、或は以上の言に誤があるかも知れないが、から言ふ見方も出來ることを一言したのである。曾て吉澤義則先生によつて、歌合の判詞から歌語の研究が試みられることを敎へられた自分は、俳諧の式目によつて、語感の研究が可能であることを思ふ。その意味から先づこの「御傘」なども見直さるべきである。

「世話盡」（明曆二年刊、釋察顧撰）。これも俳書であるが、俳書の國語學史的考察は、本稿では之を以て最後とし、やゝ委しく述べておかうと思ふ。この書は大體から見ると、その語學書的價値に於て「毛吹草」と相對せしむべきものである。序の中に、「初心抄」（了意著？）「無言抄」「はなひ草」の諸書を、友に借りて俳諧を學んだことを記してゐるが、著者が最もお蔭を蒙つてゐるのは立圃の「はなひ草」であつたらしく、晩年初心の友から俳諧を尋ねられたのに、已れが過去を思つて、「鳥なき里の香もりと、此書を拵へて世話盡と號し、一部五卷を編む云々」といひ、又「水上は野々口より出る流を汲めり」とも言つてゐる。著者は土佐國高知山麓、圓滿寺の沙彌であり、察顧又は皆虛と言つた。書名は、一に「世話燒草」ともいひ、柳亭種彥も、本書を「俳諧世話燒草」として引いてゐるが、「彼蝸牛之角の諍を扱は

んと思ふは、よきせわやき種也」と著者が跋してゐる所に據つたのであらうか。五卷の內、卷一から卷三までが辭書的である。卽ち卷一は、

一　四季之話（詞とも話ともしないで、話とある）

二　神祇之話、三　釋敎之話、四　戀之話、五　述懷之話付哀傷、六　旅之話、七　俳諧之話、八　酒宴之話付舞謠、九　碁之話、付將棊双六、十　躍之話付相撲

卷二は、

十一　曳言之話、十二　消息之話、十三　市之話

卷三は、

十四　伊呂波寄因誹諧付。これは語彙を例のやうにいろは順に列擧して、その各に聯想的用語を註したもの、「毛吹草」と同趣である。

卷四は、いろ〳〵の式目十四條。卷五は、回文詞、發句帳、付句、歌屑千句の四類にわけて、すべて實例を擧げて說いてゐる。この目錄を見ると、語彙の分類に注意すべきものがある。卽ち、一の「四季之話」から、七の「誹諧之話」までは、先づ和歌連歌の部立を襲うたもので、他の類書と變りないが、八の「酒宴之話」から十三の「市之話」までは、これまで述べて來た俳書には見當らない分類である。今、これらの分類語の中で、自分の興を惹いた例を少し擧げると、

捨身、浮世、牢人（浪人）、一錢剃、家賣、摺切（すりきり）、積やみ、自勘忍、笑止、ときわけ小袖、小尻つまる、目のはた廻

る、かせ世代(所帶)、はだしつるむき

など、「述懷」の部にあるが、これだけの例でもわかるやうに、近世一般の文學語も多いが、中には今日の辭典には勿論採擇されてゐず、その意義の一寸解しがたいものも相當に見える。「酒宴」の語として

いやく三盃、小澤誓文、まつはりがまし、水ぞうすい、三國一、角行ざし

などあるが、「角行ざし」は次の將棋の言葉の應用であらう。「雜之話」には、「さし」「くどき」「せめ」「賽子」、「誹之話」には「くり」「さし」「すがほ」「松はやし」など。「碁之話」には、

はま、四目害、しちやう、はぬる、おさへる、中手、かうな立る、手見せきん

など甚だ多く、「將棋之話」には、「馬だて」「都つめ」「鼻くさり」「圍」「引手」「手懸」「角行道」「石部金吉」などある。今日も、物固い者のことを「石部金吉」といひ、又、いはゆる「かこひもの」、「てかけ」(妾)といふ語も行はれてゐるが、これらは、もと將棋用語であつたか、或は、普通語を將棋用語にしたのか。識者の教を乞ひたいものである。

「雙六」の語として、

どう、手打、こい目、さつとちれ山櫻、六尺踊れ沖のこのしろ、下作は舟がはやい、ぐにん夏のむし、ぐしく腹の立つばかり、切、ぐにぐま太郎

など、意味はわからないが調子の面白い語が集めてある。「ぐにん夏のむし云々」は「柳亭記」にも引かれてゐるが、近松の「出世景清」二にも、「ぐしく\となりけるは、誠にぐにん夏の虫と戯れて」とあるのは或は本書に據つたか。尤も宗祇法師の作といふ「兒教訓」にも、「ごつくともせぬ首の骨(中略)是かやぐにん夏の虫」とあるので、俄かには斷ぜら

れない。たゞ近松にしても、その出典を例の「智度論」にまで仰いだわけでもあるまいと思ふ。

「踊之話」は、

京踊、木曾踊、鎌倉踊、土佐踊、しゝ踊、やゝ子踊、ふりう

「相撲之話」は

芝居堅（しはゐかため）、堅屋組（かたやくむ）、露拂、ならし、ひろひ

などあげてゐる。これで各種の語彙に亘り、その一斑は窺へると思ふ。以上は巻一に收めてあるが、巻二に至ると、「曳言之話（ひきことのわ）」の爲に大分の頁を費してゐる。これは諺の類で、即ち「世話盡」といふ特色はこの部にあるのではないかと思はれる。とにかく本書が後の辭書類に引かれてゐるのは、多くはこの處からである。その諺の數や内容について「毛吹草」のそれと委しく比較研究する暇を今持たないが、「毛吹草」がその多くを對句的に並べてゐるに對して、これは採擇の諺全部をその頭文字についていろは順に排列してあるので、大いに索引に便利である。次に「消息之話」は、即ち手紙用語集である。先づ「消息往來」などの類から採つて來たものであらうか、「一筆」「尊札」「最前」以來」「所存」「公儀」の如き、とにかく漢字を複合させて作つた熟語を擧げ、「上來古ヨリコヱ（筆者註、音讀のこと）ニ云馴タル詞皆誹言也、今新シク作テ云ハヾ制なるべし」と註してゐる。その次に、

まめ成、なんぼう、たぼける、ひたと、しやべる、かぶく、うつくる、きつし、すれこくり、わんざり、ひじまする、だうける、つばなかす

などの如き語を擧げ、これを「ひら詞」と稱して「誹言」と區別し、「誹言入れがたき所ならば如此も苦しからざる也」と

言つてゐる。更に、目錄には擧げてないが、「續詞」といふもの、例へば

時刻到來、外聞實儀、道理必然、無理無體、供揃子、ざれ雜談、犬畜生、棒ちぎり木、目口かはき、下戸上戸、行住座臥、農具鍬鋤

といふ如き、正しい漢語とも見られず重言とも定めがたい、多くは漢字四字から成る熟語、時には和漢折衷の熟語を並べて、「詞不足の時、自然か樣の續も使なるべきか」といつてゐる。この種のうち、國語のみから成つたものとしては、

ぬつたりはげたり、おしつへしつ、にげはしる、たゝりまつり、おりめきりめ、きりもり

などを示し、「かやうの平めなるつゞき詞、あげて數ふべからず」と註してゐる。最後に、分類上最も特異な語彙は、「市之話」である。

朝熊天酒、朝音途、賣つめ、えり錢、一文えり、なげ、ほりがひ、空誓文、めのこ算用、めつそう買、所うばい、足下見る、親の目に灰ぬる、佛の目ぬく、田舍向

など、これらは今自分が手當り次第に引いた例であるが、その中に、嚴格な意味の商業用語でないものがあるにしても、とにかく、この種の語彙に着眼した處が面白いのである。そして著者は（この語彙の條ばかりではないが）、「かかる特別の詞は、具さには知らないから、詳細にあげることが出來ない」とか、「知らないからやう〳〵三五人に習つてこれを載せた」（相撲之話の條）とか言ふ意を述べてゐる。さうした言葉の内には、語彙の採集と分類とに對する著者の熱心も窺はれてこの書の有難さを一入深く感ずるのである。そして尚附言すべきは、すでに本講座にも執筆され

た菊澤季生氏のいはゆる「國語位相論」の立場から見ても、本書が特に留意に値するといふことである。

3　語法書の一二と語彙研究

上來述べたところは、何れも語彙に關することであつたが、こゝに初めて近世語の假名遣及び手爾波研究に關する一書を紹介する段になつた。それは必ずしも前述の諸書と國語學史的に關係するものではないが、俗語としては、やはり俳言を對象としてゐる點もあり、もともと連歌俳諧の爲に著されたらしいとも考へられてゐるものである。卽ち「一歩」三卷（延寶四年正月刊、著者不詳）がそれである。一名「手爾波蓬」ともいひ、內題も卷によつて兩者區々に記してあるが、題簽に「一步」と大書し、その右下に「手爾波蓬」と細書してあり、序にも「一步」と名づけた次第が縷述してあるので著者の考は明かである。大體、上卷中卷が手爾乎波の研究で、下卷が假名遣の書である。草子類、連歌、俳諧、常の詞などに、手爾乎波と假名との誤が多く見えるので、「心の及ぶ所を批判して書き記し」て本書を成したと序してゐる。この「常の詞」と對立的に、著者は又「文體」といふ言葉を用ひてゐる。「文體」は卽ち文語で、「常の詞」は俗語卽ち當時の口語と解せられる。連歌用語に對して俳諧用語を別に考へ、「文體」に對して「常の詞」をも研究對象としてゐる所に本書の特色が見える。凡そ、假名遣及び手爾乎波研究の書の中でも、本書は先づ早い方であるに拘らず、かく俗語に研究的眼を向けたことは、近世國語學史上の異彩としなければならぬ。そして當時世に流布してゐた定家卿假名遣と稱するものをさへ、頭から信用してゐないと見える（下卷）のも痛快である。先づ上卷で、「過現未の事」（筆者註、動詞の過去、現在、未來、卽ち時のこと）を說いてゐる例をあげると、

常の詞に　きのふさる人のいふは

是も過現の相違也。「いふたは」と言はでかなはぬ手爾乎波也。又云きのふ共むかし共言はずして、唯「去人のいふはそれでは
ない」などいふも過現の相違なり、是も「いふたは」といふべし。さる人といふは過去の詞也云々（上巻の八枚）

の如き筆法である。（句讀點と引用記號とは筆者の案。又、假名を漢字に改めた處もあるが、假名遣は原文のまゝである）。又、

或人茶椀を取落し、打碎いて云「よい茶椀じやに惜しい事じや」

これも、「よい茶椀であつたに云々」といふべきであると言つて、その理由を說いて、「よい茶椀」と言ふは碎かない時のことで、碎いてしまつては「よい茶椀」ではないからだと言つてゐる（上卷の十六枚）。とにかく語法的に敏感であつたらしい著者は、かくの如く往々にして語法的範疇と論理的範疇とを强ひて一致せしめようとしてゐる。この他、今日いふ動詞の自他の事、助詞、助動詞、副詞等の用語について、實例によりつゝ、上のやうな考へ方で委しく說いてゐる。

假名遣の方では、定家假名遣以來、常に假名遣で問題とされてゐるものは大抵網羅して論考してゐるが、主としては活用語尾によつて類推される結果誤りやすいものを論じ、殊にその材料の或部分を著者當時のものに取つてゐる點が、他の假名遣書と異なつてゐる。例へば、

「ひ」の假名を「み」の聲によむ事、付「ふ」の假名を「む」の聲によむ事（下卷の十八枚）

といふ條があるが、吾々はこの條項だけ讀んで、「そんな事があつたのか」と一寸考へさせられる。これは、「運ぶ」「浮ぶ」「悲しむ」「尊む」「慈む」「好む」などの語尾の假名に關したことであるが、

えらひ　えらふ　うかひ　うかふ
かなしひ　かなしふ　すさひ　すさふ
是等ゝまみむめもの五音にかよふ詞なるを、如此かんなを書来れり。但、みとむとの假名を書たる物もあり。ひふみむの内は
何れなも書贖、よく知れる人に尋ぬべし。又有同じ五音に通ふ詞、なぐさみ、なぐさむ、このみ、このむ、是等にひとふとに
書かす、此類多し。

と言つてゐる。これら著者の言が前記條目の説明であることを考へると、吾々は餘程へんな氣がする。「選ぶ」や「悲しむ」やの語尾が、共にバ行にもマ行にも活用するものと教養されてゐる吾々は、「えらび」を「えらび」とは讀むが、「えらみ」とは決して讀むまいと考へてゐる。「かなしひ」「すさひ」についても勿論同樣に考へる。然らば、著者の考は全く誤つてゐるであらうか。尤も、「ひ」と「み」、「む」と「ふ」、それぐの共通問題については、「よく知れる人に尋ぬべし」といひ、「慰み」と「好み」とは右の「選み」や「悲み」と同斷でないと言つてゐるので、著者の考も一概に論定されないが、とにかく、この種の事を假名遣として問題にすることが、自分には注意に價すると思はれるのである。

假名草子の「勸學院物語」(寛文九年刊)下卷に

こんどい御よろこびのついでに、われにじゆりやう（受領）せさせたまひ候へかしと申あけければ、べち（別）にじゆりやうをなすにおよはず、おふひのからな（唐名）は、こうしう（江州）なればとて、あふひのかうしうとそめされける（七枚表、五行目—）

とある。この文の括註と圏點とは筆者が加へたが、その他は濁點の有無、句讀點、假名遣すべて原文(稀書複製會本)

のまゝの引用である。その圏點を附した「あふひ」のうち、前者はどうしても「あふみ」（近江）と讀まなければなるまいと思ふ。これは「一歩」の著者が問題としてゐる活用語尾ではないが、「ひ」を「み」と發音させる點で、こゝに引用したのである。この種の例が文獻上どれほどあるか知らないが（管見ではさう多くもあるまいと思ふ）、近世の文獻を讀むについては、先づこの種の假名の價値（音價）に關して、特別な注意を拂ふ必要があることを教へてくれた著者に感謝しなければならぬと思ふ。

この外、「無」の假名を「なひ」「なふ」とする誤りを論じて所謂定家假名遣に抗し（下卷、二十一枚）、或は、俳諧用語を屢く連歌のそれと比較して、

連歌の書にさへ假名にかゝつ誤り侍るとかや、況んや俳諧は遣猶むつかしく覺へ侍る仔細は、雨露のふらで、などいふことなふらひでといふ類、風ふきてと言はんをふいてと云類、長き長くと云べきを、長い長うなど云類、いづれも詞うちひらめなれば、連歌には嫌ふ、皆俳諧に好む詞也（下卷、一枚）

と言つてゐる如き、珍しい問題ではないが、これはやがて俳諧文法乃至俗語語法の始を成すものと見ることは出來まいか。要するに、本書の態度もやはり規範的であり、やゝ論理と語法とを混淆したやうな見方をもしてゐるが、その研究の眼を古言雅語にのみ向けないで、直ちに我が日常の語を捕へてゐることがめでたいのである。以上自分の說述は甚だ杜撰であつたが、それでも本書の一斑は窺ひ得られると思ふ。さてこの書の當時及び後世への反響なども見たいのであるが、先を急ぐ本稿ではそれも叶はない。唯、吉澤義則先生著の「國語學史」に說いてあるやうに、「初心かなづかひ」一卷（元祿四年刊、撰者不詳）は、確かに本書の影響を受けてゐる。その序言や卷頭の總論的の

言說には注意するに足るものはないが、本文を「天地門」以下「言語門」まで、總べて三十二門にわけて語彙を類集し、假名遣ひの語を上段に、その訂正語を中段に、それに相當する漢字漢語を下段に記して、いかにも三段式正誤假名遣と謂つた風に仕立てたところが、さぞ讀者には重寶がられたことと思はれる。國語史學から見れば、先づその當時の假名ちがひの實況が一覽されるので便利である。「いざよひの月」や「てのごひ」を誤とし、「いざよいの月」や「てのごい」を正とした如き、正誤のしぞなひもないではないが、大體は立派に正誤されてゐると思ふ。若し、これを語彙の書として見ると、「家名門」からは、「藤屋」「俵屋」「柊屋」「小田原屋」など、「簡板（看板）門」からは、「おらんだ膏藥」「熊谷盃」「三輪素麪」（みわざうめん）など、「言語門」からは、ゐらん（違亂）、ほどらい（大小）、およぎうつ（拍浮、游）、かけしらふ（抱）など、近世的色彩のあるものや、吾々の耳馴れない語も出て來る。尤も、特に當時の俗語を蒐集したとは思はれないが、何にせよ、出版年代が年代である故に、國語史資料として利用せらるべきものである。「一歩」については、卷末に「先人ノ作書ニ號スル假名遣一歩抄ト者アリ是益アル書也」（「一歩抄」とは即ち「一歩」のこと）と言つて、「一歩」の旨を取つて行阿假名遣の誤を訂正したものを附載してゐる。さて、「初心かなづかひ」は「一歩」との關係上ここに附說したが、年代順に言へば、「一歩」に次いで說くべきは、

「通言假字抄」三卷（天和二年刊、永井如瓶撰）である。この書については、既に穎原退藏氏の論考（二十一頁參照）に於て、その近世語研究上の價値が說かれ、又その僞版まで出たことが述べられてゐるが、以下自分も一通りの愚見を述べて見よう。著者の自叙によると、既に「下學集」や「節用集」が世に行はれ、その後も字書の類が續出し、それぞれ又增補等も現はれて、日常書簡などの使用に便してゐること多大であるが、各得失を免れず、殊に平素の實用に緣遠

い語を解して、邇言卽ち卑近の言語をさし措いてゐるのが缺點であると思ふので、自分が讀書の際などに涉獵しておいた、世間常用の文字を輯めてこれに俗解を施し、童蒙の爲に、その日用書翰の一助ともしよう、といふが編纂の主意で、書名の意味も自らその內に明かにされてある。卷を首卷と臍卷と足卷とにわけ、各卷をまた本末二部にわけてゐる。內容全體から見れば分類辭書に屬するもので、「乾坤門」以下「言語門」まで、總べて十二門を立ててゐる。首卷には世間所用文字を集めて訓解し、臍卷には難字の出所を說明し評論し、足卷には庶物の異名を記し故事をも添へてゐる。「言語に述る所其文字分明ならざるものは、私意を交へて其義を評す」とは、卷頭の「斷書」(例言)にある語であるが、一方に故事出典を說きながら、往々にして危險な獨斷的語釋が見える。そして目次と例言とから見ると整然としてゐるやうであるが、實際各卷について見ると、その編纂法は雜然としてゐて、到底後の「諺草」の整然たるに及ばない。但し內容は極めて豐富で、特に邇言卽ち當時の俗間の用語用字を窺ふには、決して忘れてならない書である。

首卷の末、「時候門」に次の如くある。

　嚮時　今俗に書札返報の端にこれを書り、(中略)只今の儀也。

これは世間所用文字の訓解の一例である。

　陽鳥、雪丸、木居、恍惚子、豆子、蠋、揲子、貝稱、中蓋、圖景、刷牙

等は難字出所訓解に擧げられたもの。

　欲々　欲々しきと云心也、欲の字をほるともほしともよめり、よくほるとは訓音を重說する詞也。

これは難字出所の評論に屬する例で、大いにあぶないと思はれる說である。

大語(フハゲカ)、押柄(ヲフヘイ)、色弗(シ、ブチ)、齷齪(チ、クル)、

「コハダカ」は、コワダカ（聲高）であらうが、この如きを義讀(ギヨミ)といふと說いて多くの例を擧げてゐる。

散廉(アラケル)、不忍(イブリ)、望姓(モトデ)、進疾(ス、ドシ)、習氣(シツケ)、嘲戲(チヤウケル)、

この最後の例は、後の三馬の「浮世床」に、

何だナ此子は、ぜうけなさんなといふに（初篇の上）

とある如く、チヤウケル—ゼヴケル、と轉じたらしい。

とにかく、この「義讀」と、

人贖面(ヒトヲメ)、手杵寢(テコネル)、發屈理(ボツクリ)、退讓乞(クイジヤウコイ)、破家(バカ)、時石(ツンバイ)、禿(チビル)

などいふ「世話字」の類は、あまり差別が嚴格でないやうであるが、本書にはその何れも甚だ多く擧げてあるので、近世語研究上大いに資となる。最後に、足卷の庶物の異名列擧が、又、類語辭典的で、その訓釋も丁寧なものがある。例へば「錢」といふ標出語のもとに、先づその語義を說き、そして次に、

鵝眼、鵝目、鳥目、靑銅、靑蚨、用脚、孔方兄(クバウヒン)

の如きを擧げて、又これに一々解を與へてゐる。この書の「片言」との關係については前に一言したが、なほ、「勿體なし」「等閑」「如在」「江帥」等の如き語彙に於て、「片言」に負うてゐる所が多いのではないかと思はれる。

「雜字訓蒙圖彙」（貞享四年刊）。この書は前記「邇言便蒙抄」の一名として、「國語學書目解題」に註してあるが、その註の妥當でないことは、潁原氏の旣に指摘されてゐる（書物展望二ノ十一）通りである。五卷三冊の體裁をなしてゐる

が、實は卷二を缺いてゐるし、小本にして繪を挿入し、一寸讀者の目を引くやうにして使用し易くはしたものの、全く前書の僞版であること、亦潁原氏の論ぜられた如くである。しかし、僞版ではあるものの、原書の便業抄が見られない場合には今日も役に立つし、當時も世間に行はれたであらうと思ふので、こゝに書名だけを掲げたのである。ただ讀者は上の事實を承知して本書に臨むべきである。その內容は原書の如何はしい改竄ではあつても、決して增訂どころでなく、挿繪こそあれ、本文は却て乏しくなつてゐる。尙、潁原氏の說には「享保十五歲孟春吉辰、京の木村市郎兵衞と大坂の安井嘉兵衞との合板」とあるが、帝國圖書館所藏のものは、貞享四年十一月、安井嘉兵衞一人の刊である。すると僞版そのものが版を重ねたものと見える。

「鼇頭節用集」四卷(貞享五年刊、香取哲齋補)。近世語の研究に資すべき字書としては、寶永五年に初版(元祿十一年自序)を出し、その後、屢々版を重ねた「書言字考」一名「合類大節用集」が最も有名であるが、この一書も亦顧みられてよいものと思ふ。「増補俚言集覽」に、確か「貞享節用集」として引用されてゐるものはこの類書であらう。(貞享三年にも「廣益二行節用集」が出てゐて、眞草兩點のところが相同じいが、或はその方かも知れぬ。いま、一々對照の時を得ないので、手もとにあるこの一書で類書の紹介にかへる)。美濃判本で、內題は「鼇頭節用集大全」とあり、「天地」「地候」から、「苗氏」「所名」まで總べて二十二部に分類し、いろは順に丹念に言葉を集めて、一々これに漢字を當てたものである。或は漢語・漢字を集めて、讀みによつて排列したものとも言はれよう。語釋を註することは多くないが、言葉から當時の俗用文字を引くには都合がよい。例へば「言語部」で「かたこと」を引くと「訛」の字が當ててある。「書言字考」や高井蘭山編「俳字節用集」にも、同字が當ててあるので、或は、この字は貞享の當時から俳字であつたの

かといふことが疑はれる。西鶴の用字のうち、曾て自分が疑つた「夯」(かたげる)もある。「通言便蒙抄」にもあつた「欲々(よくほる)」や「習氣(シツケ)」の如きも本書の叢頭にある。「强盗(がんどう)」「治定(しかと)」「丁扣(ちやうどうつ)」「搭推(ほうどくだく)」など、例の世話字盡の用にも立てば、時には方言の資料にもなる。尤もこの如きは本書に限らず、江戸時代に編纂しなほされた多くの類書に共通する特色でもあらうが、たゞ本書は刊行が比較的早かつたといふ點を認むべきであらう。次に、語學書ではないが、

「女重寶記」五卷(元祿五年刊、艸田寸木子叙)といふ書がある。その卷五が「女節用集」となつてをり、又卷一にも「女ことばづかひ付たり御所大和詞、祝言、いみ詞」の章があるので、こゝに一言する。まづ卷一のその章に、

男の詞づかひを女の言ひたるは耳にあたりて聞(きく)にくきものなり。女の詞はかた言まじりにやはらかなるこそよけれ。文字にあたりこばしなどして言ふ事かへすぐ\惡しき事なり。萬づの詞に「お」と「もじ」とを付けてやはらかなるべし。(筆者註「こばし」の語義は次にいふ)

と言つて、次にその例を擧げてゐるが、「女の詞はかた言まじりにやはらかなるこそよけれ」といふのは、安原貞室の「片言」に見える言語教育觀と、それを受けた、次に說かうとする「世話重寶記」の意見とに對して甚だ興味がある。尤も貞室の「片言」にも、

御盃(おさかづき)をいたゞき侍らんといふべきを。頂戴仕りまらせうなどゝいふは。そのむかふ人によるべし。(中略) 頂戴ぞ御盃ぞといふ人は。己れ、はからざる輕薄者に成(なり)侍ることなり。いとも恥しきこと。又その身に應ぜずして。こばしがほも憎しやと云(いへ)り(卷一)

の如き條があるので、敢て本書の說と正反對であつたといふのではなく、本書にも、

一、内の者又は下々といふべきを家來又は下人といふはわろし。
一、もとよりといふべきを元來の根元のといふはすさまじ。
一、あたゐむつかしきといふを代物高直（だいもつかうじき）といふは聞（きゝ）にくし。

の如き實例を十三條もあげてゐる所を見ると、寧ろ「片言」の說を襲うてゐるかに見える。ここに序でながら註しておきたいのは、「こばし」（日本古典全集本の「片言」には「こぼしがほ」とあるが、「こばしがほ」の誤植であらう。）といふ語のことである。「昨日は今日の物語」の上卷にも、漢語を使ひそこなつた者を、「こばしだてなる人」と笑つてゐる語がある。「こばしだて」、「こばしがほ」「こばしなどする」といふ、何れも物言ひに關する語であるだけに、語源・語義の判然としないのが氣になる。特に言語について、さかしらに賢（かしこ）がる義と思はれるが、判然と分らない。或は「ばし」といふ語と關係があるかどうかについては、後に觸れる機會もあらう。さて、「女重寶記」のこの章では、以上の外に更に、

にくいやつ、誰め、すきと、ひどい、げびろ、やく、氣の通る、おてき

の如きについて、「かやうの時のはやり詞など、よき女中の一言も宣ふ事にあらず」と嗜めてゐる。そして「女のやはらかなる詞づかひ」としては、（括註は、同書によつて、筆者の加へたもの）

おさなひ（子供）、ひるぐご（晝食）、いしい（旨い）、大まん（壹分饅頭）、小（こ）まん（五りん饅頭）、おひろい（歩く）、一つ（一ばい、盛りものなどの）、おとうにゆく（大小用に行く）

等三十七語を擧げ、「祝言の夜の忌詞」は十六語を擧げてゐるが、「さる」「のく」「うすい」「しまぬ」など今日いふも

のと大差がない。「大和詞」は衣類、食物、青物、魚類、諸道具に亘つて、すべて百八語を擧げてゐるが、これは謂はゆる「女房詞」で、もと御所方で用ひられるのであるが、普通民間に用ひられるものも多いと言つてゐる。今日あまり耳にしない方の例を擧げると、

おいろ（紅）、おざつ〻（鼻紙）、やわ〳〵（ぼたもち）、おけたれ（剃刀）、くろ（鍋釜）

などで、これに關する文献もすでに室町期以來現はれてゐるので、本書も固よりそれらに據つたのであらう。更に、「女節用集」の卷では、普通の節用集の式に倣つて、「女用器財門」「女衣服門」「絹布類」「萬染色之名」の如く分類して振假名つきの漢字熟語を揭げ、「女詞字等類幷正字」の部では、特に假名から漢字が引けるやうにしてある。次に「源氏物語の目錄」（卷名）を教へ、又それから「かなづかひをしる事」の條を設けてゐるが、この假名遣說は餘りあてにならない。たゞ、か〻る項目を立ててゐる點を多とすべきである。最後に、「新やまと言葉並に物のから名」の部では、二百足らずの雅言語彙について、普通語で言ひかへを試みてゐるが、その言ひかへにも、特に近世的色彩は認められない。たゞ、この頃から「大和詞」といふ題名のもとに、一種の雅言集ともいふべき書が表はれてゐるやうであるが、中古語の「大和詞」といふ語彙を、上のやうな意に用ひたのは、本書など早い方であらう。本書の出版から三年後に、同じ書肆から全く同じやうな體裁（五冊の半紙本で題簽の頭に「ゑ入」と圓形に圍んだところ、本文の挿繪などまで）で出版されたものが、

「世話重寶記」（元祿八年刊）である。本書については新村先生が例の「片言」の解說增補に述べてゐられるので、今、それを參考にして所見の一二を記して見る。先づ、本書の撰者は不詳であるが、或は前記「女重寶記」の叙の筆者が同

書の著者でもあり、また本書の著者でもありはしないかと疑はれることである。「女重寶記」の著者は前述のやうに言語・詞づかひに多くの關心を持つてゐた人らしく、同書で特に女のために試みた詞づかひ、物言ひの講說を、更に一般的に廣め、世話及び方言訛語の蒐集解說を本書に於て試みようとしたのではあるまいか。それにしても、果して「艸田寸木子」といふ人が、その著者であつたか否か。著者であつたにしても、如何なる人であつたか傳記的のことはわからない。唯この人は又「年中重寶記」や「本朝歲時故實」の著者であり、俳人であつたらしといふ臆測だけを記しておく。內容の大體は書名の如く、世話即ち俚諺成語をいろは順に採錄して、これが出典・意義を解說することを主とし、又「い」の部、「ろ」の部等の各部の解說の終り每に、「世話の片言」と題して方言訛語を集めて附記してゐる。

色を見て惡をさす。六具をしむゐ。馬鹿にする。如虎〱といふ類字。火むらをもやす。米滴といふ異名の說。東西〱。

右は、いろはにほへと、の各部から一例づゝ引いたのであるが、これでその一斑はわからう。各部每の片言は、大體が貞室の「片言」からの再錄と思へばよい。重寶な點から言へば、「毛吹草」や「世話盡」の俚諺と、「片言」の諸例とを併せ見るやうでもあるが、世話の解說に至つては、隨分附會說に陷つてもゐる。これは、當時一般の語學方面の研究程度が然らしめたことであらうが、この著者も、「童幼の言もその據ある事なれば、況んや長の俗間にいふ世話も出所ある事なれど、出所を知らねばおのづから誤り言ふことおほし(中略)。この書を師として大人小人の人間の話言に誤なからしめん事を欲するもの也」と序してゐる精神は可とすべきも、實際の出處解說を見ると、やさしい事にむづかしい理屈をつけたものが多いのは惜しい事である。しかし、「片言」の抄出については、「時代を隔てゝ言語上の習慣の變遷もあるが、古めかしいものや廢れたものや無用のものや、極端なものやを削除修正した所が多い」といふ、新

村先生の注意すべき言葉を拜借してこの項を終らうと思ふ。

「和爾雅」八卷（元祿七年刊、貝原好古著）。書名にもよるのか、本書は近世語研究書として特に顧みられてもゐないやうであるが、「日本釋名」の著者であり、本書著者の叔父であり養父である貝原篤信が、「方國ノ語ヲ採リ、民俗ノ言ヲ考ヘ」と本書に與へた序に曰つてゐるやうに、又、著者自身が、

此ノ編專ラ童蒙ノ爲ニ之ヲ選輯ス。記スル所ノ事物、惟、方俗從來熟知スル所ノ者ニ隨フ（凡例原漢文、以下も同じ）。

と言ひ、物の名義を記すにも

俗ニ近ク解シ易キ者ヲ以テシ、其ノ和訓ヲ加フルヤ、俚言俗語ヲ避ケズ、以テ人ノ知リ易カランコトヲ要トス。

とも言つてゐるやうに、書名と本文の漢文とが想像せしめるほどに硬いものではないのである。「天文」「地理」以下「言語」に至るまで二十四門に分ち、別に「雜類」を附してゐる。各門標出の語は殆どすべて假名つきであるので、それがやがて當時の俗語を示し、或は訓義を語るものと見られ、吾々に取つては近世語研究の資料となり、著者の語學を知る材ともなるのである。試みに「數量門」を繰つて見ると、その「權衡名（ケンカウノ）」の條に、

金一枚　和俗金十兩ヲ一枚ト爲ス、卽チ四十七匁三分也

銀一枚　和俗、四十三匁ヲ以テ一枚ト爲ス、卽チ銀十兩也

などが採られ、「器用門」を繰ると、「飮食炊煮具」の條に、

磁盆（サハチ）　俗ニ砂鉢ト云フ。

春盤（ホウライ）　四時寶鏡ニ云、唐立春ノ日春餅生菜、春盤ト號ス、今按スルニ倭俗歲首蓬萊盤モ亦此遺意ナルカ。

の如き例が見られる。或る國語讀本に採られた益軒の文に、この「春盤」がシュンバンと讀まれ、教師を苦しめた話を聞いたが、益軒は初めからこれをホウライ(蓬萊)飾のことに、使つたものらしいのである。吾々はこれをこの叔父甥兩學者のみの獨斷となすべきであらうか。「言語門」からの例を引くべきであるが、一體のこの種の書は、「言語門」に限らずすべてが言語研究、特に語彙研究の材料を供してくれるのである。次には同じ著者の、

「諺草」七卷(元祿十四年刊)がある。著者は、先に、童蒙の爲に「和爾雅」を著して、眞字を知る便としたが、それには「女文字」ならでは解きがたい言語などをば漏したから、「今の世俗にとなふる諺、兒女のいふ詞ども」の、和漢の書に基づいた出所の正しいものを選んでこれを記し、近頃の人の集めておいた假名文などに、和語を説いたものがあるのをも拾ひ取つて本書を成したと言つてゐる。その材料を先づいろは順に分け、第一に「諺」の出所あるものを記し、次に、「俗語」(これは、單語を主とす)を記し、最後に、「正諺」即ち「あやまり唱ふる詞」を正してゐる。この順序で説いてゐることは、いろは別各語彙に通じて全卷一貫し秩序だつたものである。凡例の中で、

> 時勢風俗より起りたる鄙語の、文證出所なきも多し。それを妄りに理を付け、文を引き、しゐて本語を求め、文字をつくるは、かへりて人をまどはすわざなるべし(中略)。故に、據ある言語をのみ擧げ侍る。

と言つてゐるのは、附會説の多い時代に在つての卓見といはねばならぬ。かくて、著者の「諺」の出典故事の説明は、大體に於て信を置くに足りるが、出典のない諺を擧げないといふのは、今日の吾々からは、遺憾でもある。又、

> 兒女のいひあやまれる片言、都鄙ともに少からず、さきに都の人、片言とかやいふ書を作り、それより後もなを辨正(べんせい)を加(くはへ)たる書も出來ぬ。

といつて、方言訛語に關する書の世に現はれ來つた狀勢を叙してゐるが、「片言とかや」といふ口吻は、「片言」の書に對して今日の吾々が認めてゐるやうな價値を認めてゐないからで、一つは時勢の然らしめる所でやむを得ない。更に著者が續けて言つてゐることは、新村先生も指摘してゐられるやうに、特に一讀に價すると思ふので長いけれども引用する。

誠に諸人のあやまり來て、正音正訓にかなはざるものは、のがれ難き片言なれば、尤もこれを正すべけれど、士大夫すこし文知れる人は、さのみ片言をばいはず。兒女下賤の云ふ片言は習つて常となれば、今俄には變じがたく、ことごとくおしへがたし。況んや、片言のをのづから熟語となれるもあり、又五音相通ひてとなふる詞も多し。又和音のならひ、引をひかざるもあり、引ぬを引もあり、略して短きあり、益して長きあり、是を片言と思ひて、盡く正さんとせば、かへりて和音を知らざるものならし。故に此書には、大にあやまれるかた言を擧てこれをしるし、童蒙の詞を正す助とするのみ。

この言の中には、「片言」の著者安原貞室の意見と同樣な點もあるが、敢て反對した點もあるやうに思はれる。「童蒙の詞を正す助とする」といふ、規範的意識から來る結論は同じでも、片言といふものに對する兩者の考には開きがあつて、この著者の方が貞室よりは、言語音聲の本質やその變遷の已むなきことを、はつきりと認めてゐたかと思ふ。

さて、解說の實例について見るに、「伊」の部の「諺」の一つに、

伊勢や日向の物がたり　俗諺に。あなたこなたの一方ならぬ物語をいへり。

と書き出し、更に神代紀卷下に據つて解釋を續け、この諺が、天鈿女命と猿田彦大神との問答から起つた由を說き終つて、「新考」と斷つてゐる。「新考」とは、當時刊行された諺研究書に出てゐない諺に對する著者の新研究のことであ

る。「新考」のことも凡例に斷つてあるが、この類はさう多くは見當らず、大抵は故事出典のあるもので、凡例にいふ通りである。「波」の部の「俗語」に

破志（パシ）　俗に。言行法に背て。我ために益なき友を破志者と云。尤意義あり。志とは心の趣き向ふ所也。心い正面まつすぐに。其志す所のめあてに行向ふを云。今一人來て邪僻の行をなさば。中人以下は遂に彼に浸淫（シンイン）せられて。德義を銷刻（ヒウコク）し。志を破るの端とならん。これを破志の友と云べし。

とある。この二例は果して信用すべき說であらうか。「妄りに理を付け、……文字をつくる」弊を警戒してゐる著者の說ながら、俄かに首肯しがたいと思ふ。しかし、出典、本語はともあれ、この書によつてこれが當時用ひられてゐた意味を知り得ることを吾々は感謝せねばならぬ。この「ばし」には可笑記（寛永十九年）卷一に、

○利養利口に高ぶり、欲に移り利に迷ひ、馬子（つつ）なる事を好みもてあそび眞なるなばあらいやの……ときらひあざけり、

○うりかひ利とくの事、或は內の者共の悲み迷惑する仕置才覺行儀、眞なるやうにて馬子也。

などの用例があり、「諸人敎訓」（正德五年刊）には、「ばしなる風俗は、能人のする所にあらず、いかんとなれば、ばしなる風と云は、風のふくごとく當世〳〵にはやり來るを見て、これをまねてする」（卷一の三。國語國文、二の六、潁原退藏氏「近世文學選釋」にも所引）義だとの說もある。或は、既出「こばし」の語とも關係あるか。「諺草」の說も、これらと比較討究せられねばならない。（後出「本朝世諺俗談」の條參照）「正譌」の例は、

鳶（トビ）　とんびは誤。萩（ハギ）　とつくは誤。蜻蛉（トンボウ）　とんぼ。又とんぼう並誤。陶器（トウキ）　とつくりは誤。

の如くで、語彙といひ、解說の手法といひ、貞室の「片言」に負ふところが大きいことは言ふまでもない。この「正譌」

よりも「諺」よりも、「俗語」の部に說いてゐるところが、語彙研究上興味あるものが多いかと思はれる。次に、

「和漢古諺」（寶永三年刊、貝原篤信著）は、上卷を和諺、下卷を中華古諺としてゐる。

上代の和語は古めかしくてよし、中世以來のことばはいやし、甚いやしきと理にそむけるは風俗と人心に害有べければのせず、此内にも猶いやしきことはありなん。云々

とはしがきして、すぐに諺を列擧してゐる。「風俗と人心とに害あるべければ」といふは、「いはずしても事缺き侍るまじき詞」を說いた貞室を想はせるが、その諺の排列は、讀みものとしてよく考へたものらしく、「花は根にかへる、鳥は古巣にかへる」「白川よふね、見ぬ京物がたり」など、內容からも口調からも對（ツイ）にして、續けて讀んで面白いやうに出來てゐるのが注意される。しかし、著著の以上の如き見地から、古來の諺を如何に取捨したか委しく檢討する暇がないのを遺憾とする。或は對句的の排列は毛吹草に學んだのかも知れない。

「書言字考」十卷（寶永五年刊、槇島照武著）は、前にも一言したが、委しくは「和漢音釋書言字考節用集」といひ、外題には「增補合類大節用集」とある。これは赤堀氏の「國語學書目解題」によると、獨逸で銅版に附されたものが一冊あるとのこと。出版當時以來よく行はれて有名なものであり、本講座でも、龜田氏の「國語學書目解題」に、旣に出てゐるので自分は大略するが、唯、近世語研究の上に見免してならぬことを一言しておく。松井簡治先生も話してをられたが、この書は江戸時代以來有名なものであるが、今日では多く利用されないといふ。思ふにその本文が、「和爾雅」のやうに漢文であるので、一寸取りつきにくい感じを與へるし、近世俗語とは緣が薄いやうに思はせるからでもあらうか。

尙、諺の研究方面では「本朝俚諺」（正德五年刊、井澤長秀著）があり、その中に俗言をも說いてゐることは、また赤堀氏の「國語學書目解題」にも紹介されて居り、この書が又、後述の橘守部の「俗語考」に影響を與へてゐることは、同書解題に指摘してある通りである。さて、時代が前後したが、この方面の書で是非こゝに擧げなければならないのは、

「本朝世諺俗談」七卷（貞享二年刊、松浦默著）である。延寶七年の序があり、同九年卽ち天和元年の跋があるので、事實としては、既述「邇言便蒙抄」と時を同じうして、或はそれよりも前に出來たものである。伊勢貞丈の隨筆に俗語註釋の書として擧げたのもこの書であらう。その語彙分類の如きも學問的で、例へば、卷一「典故」部に、

杜氏（トウジ）、懸香（カケガウ）、藏六、蘭炙（ラツン）、正載、向火　など

卷二及び卷三「凡言」部に、

世智便、龜鏡（ヤケイ）、百一物、打擲、家嚴、輕薄、目論（モクロミ）、且暮（ダメ）、粉骨　など

卷四「單字」部に、

噪、嘸（サゾ）、乍（ナガラ）、欠（カン）、諷（ウタヒ）、匁（モンメ）　など

卷五「義訓」部に、

愚人（シラフト）、醜物（シコブツ）、匹如（スルスミ）、小端（ハツハツ）、人望（スゲ）、出葉（デニハ）　など

卷六「假借」部に、

曉々、德々、非覺、相場、破志、且暮勘（タマカ）　など

の如きをあげ、卷七は「世諺」部であるが、これは漢籍・佛典の故事あるものが多く、近世的色彩あるものが少ない。本書には「片言」よりの影響は見られないが、本書が、例の「世話重寳記」や「諺草」に與へた影響は、相當に大きいものがあつたと見られる。殊に「諺草」の處で引用した「破志」の一語についての説は、實は全く本書からの抄錄に過ぎなかつたことを、こゝに一言しておく。本書中、特に近世語研究上に興味ある説明は、「凡言」「單字」「義訓」「假借」の各部に多いと思ふ。(因みに、「輪池叢書」第三十に收めた「日本俗諺集」は、本書や「諺草」からの拔萃と見られ、その數も多くはない。)

三　國語學者及びその他の俗語說

こゝまで稿を進めて來て、これを普通の國語學史に比較して顧みると、恰も、第一期(契沖以前の總稱)の終を受けて、第二期(契沖以後、本居宣長の歿年まで)の始に入つた所である。自分は、近世語研究の史的考察を、强ひて普通の國語學史と並行せしめようとする者ではないが、この前後は謂はゆる文藝復興の時代に當つて一般學問の研究熱も高まつて來り、國語學の方面にも一期を劃した時代であるので、當代以後、普通の國語學史に於てその業績を稱へられてゐる人々は勿論、その他の學者に於ても、もし多少でも近世語に關心をもつてゐる者があるならば、改めてこれを探りたいと思ふのである。近世の學者が近世語に無關心であつたことは、既に屢〻言はれて來たのであり、一概の論はその通りであるものの、水源はいつも見えない山中に發するものである。故に、今、自分は聊かその水源を探らうといふのである。

先づ僧契沖は、或は隨筆の類に、例へば「圓珠庵雜記」などに、俗語に觸れたことを一二言つてゐるやうであるが、契沖から俗語說を求めるのは、それこそ求めるのが無理であらう。貝原益軒に「和漢古諺」の著があることは、既述の通りである。新井白石に至つては、かの有名な「東雅」(享保二年成)の總論に於て、天下の言に古言、今言、方言、雅言、俗言の別あるを說き、「古今の言に相通じなんには先づ其世を論ずべき」を言ひ、京都語の變遷に尾州參州の方言が影響したといふ貞德の言を傳へ、その他、語彙に對し漢字の用法に關してなど、凡そ言語について、いろ〳〵卓拔な意見を述べてゐる。その今言、俗言の當然存すべきことに言及したのは、殊に吾々の多とする所で、白石としては特にこれを考說したのではないけれども、當時においてこの見識があるのは十分尊敬に價する。同書の本文の中に、又往々にして當時の俗語方言、用字にも觸れてゐて、近世文學語の解釋にも吾人に資する所がないではない。物徂徠は國語學者ではないが、その隨筆「南留別志」三卷(元文三年刊)は、國語學書として扱はれてゐるもので、特に近世語に注意したとも思はれないが、「古の詞は多く田舍に殘れり」(この意味の語は、近世多くの學者に言はれてゐる)といひ、方言と古語との關係にも興味を持つてゐたらしい。改易、けらい、過所、おどう(方言)、めらう、せがれ、まみ穴、七里けんばい、さんざん、などの如き語について、一言づつ說を述べてゐる。しかし、本書の語學說に對しては富士谷成章が、「非南留別志」を書いて反對してゐるほどで、とかく精說に到つてゐない。尙、國語學者ならぬ田宮仲宣の隨筆「橘菴漫筆」の初篇「東牖子」(享保—)にも、俗語方言に關する二三の考說がある。卽ち、エライ、ヲジヤレ、ゴザレ、タモレ、キサマ、ヲクレ、ホシイ、トハウモナイ、ドンミリ、チダンダフム、などを例として、特に畿內に於ける言語の亂雜になつたことを言つてゐる。又、柳里恭(寶暦八年歿)の「雲萍雜志」にも、關東では、ひ(火)、く

こ(枸杞)といふを、五畿內では、「ひイ」「くこウ」といふなどの方言比較を試み、特に音聲に、興味を覺えたと見えて、例の「せんたく」(洗濯)と「せんだく」についても、東西の差異を指摘し、「大根とはねつる文字ははねやらで、はねずともよき牛房ごんばう」と戯れてもゐる。又、この人の隨筆「獨寢」(燕石十種、第二所收)には、いはゆる「通言」に屬する「花言(からこと)」といふものを、六十語足らず載せて說き、又、甲斐の國の方言をあげて丁寧に註してゐる。のみならず、この隨筆の文章そのものが、近世語資料としても價値があると思ふ。

谷川士清(寶永六年―安永五年)は、「和訓栞」の大著を公にして、辭書史上に劃期的の功を成したが、その近世語に對する關心の度は果してどうであつたらう。その採錄語彙に口語がどの位あるであらう。とにかく、同書卷頭の「大綱」には、著者が當時の俗語方言にも非常な研究興味を持つてゐたことを語つてゐる。自分は方言に關する幾つかの歌をこの著者によつて敎へられた。例の「あづまにて養はれたる人の子は」といふ拾遺集の詠を始め、十一首ほどの各地方言和歌は、何れも面白いものである。例へば、「土佐辭をよめる長曾我部の歌に」として、

けゑ〳〵とちふはわこらかゑずらしや、ぜじやうしやうちくよんべきたちゝ

といふを擧げ、これを解して、

けゑ〳〵はこれ〳〵と人を呼也、ちふはといふ也、わこらは吾子等也、ゑずらしやはいやにおもふ也、きつい事をゑずいといへり、ぜじやうは總體といふ詞、世上にや、しやうちくは精盡くるにて事に倦むをいふ、よんべは昨夜也、きたちゝは來たといふ也、ちゝはちふの轉にて、毎々語助につけていふ也。

といふ。他の歌の解も大方かくの如く逐語的で語學的でもある。

又、田舎詞に關して、濁音の多いこと、今日いふ尾音省略の類のあること、それと反對に、接頭辭をつけるのもあること、强調するために促音を添へていふ詞が多いことなど、一々實例をあげて立證してゐる。これらは皆吾々に研究項目として課されたもののやうにも思はれて、自然と著者の前に頭が下るのである。近世の國語學者は俗語に無關心であつたなどとは、士清に對しては決して謂はれない。殊に方言研究史の上からも、士清の名は逸すべきでなからうが、これについては、別にその人があつて論ぜられると思ふので、右の田舎詞に關する例なども、こゝには省いておく。（本稿、一章の末節十一頁參照）

伊勢貞丈（正德五年―天明四年）。故實家として有名な貞丈は、國語學者としても多くの貢獻をなしてゐる。先づその「貞丈雜記」に、「言語之部」を立ててゐるが、「安齋隨筆」「安齋叢書」の何れにも、殆ど每頁に言語についての考說を記し、その中に近世語に關する考說も亦多い。

「ものもう」と「どうれい」といふ詞、西鶴には「ものもうどうれの假正月」など使つた例があるが、貞丈はこれについて、

> 內より「どうれい」といひて出づるは、どれより御出候ぞといふ事なり。これらは人も知りて珍しからぬ事なれども、古よりの風俗の傳はりたる事なり。かやうの事も心づかざれば不審にある物なる間記レ之。今の人の知りたる事も後には知らぬ樣になるなり。

と言つてゐる。その最後の一句が殊に注意される。「おやじ」「冥加なき」「無二勿體一」など、例の「片言」に出てゐる語彙にも、屢〻接するので、貞丈が彼の書に留意したことは確かであると思はれる。「ふくさ」について、「今の詞」と

いひ、「こゝ〳〵」について、「江戸の詞」といひ、「無足」について、「近世の詞」にあらずといふ。これらの説明用語に徴しても、著者の近世語に對する關心の度を知るべく、その關心は又單に語彙のみならず、音韻にも語構成にも語法にも亘つてゐる。例へば、

〇ます　御ざります、いたしますなどゝいふますは申すの略語なり云々

〇おませる　人に物を進する事をおませるといふは、御參らせるといふ略語也

〇たまふと云ふ詞に三つの品あり、云々

などの諸條、「マーツ、モーツ」「オモシヤル、オシヤル」「ヒツタクル」「カスル」といふ詞などの諸項からその一斑は窺はれる。俗語用字（世話字）についても、フト（風與）、チラト（散與）、ドナタ（殿誰）、その他多くを擧げて、俗用の書狀にはこれら俗字を用ふべきを說いてゐる。ただ、貞丈の研究態度は「言語の主意を知らざれば、書をよめども心得がたき事ある故に之を記すなり」と言つてゐる如く、讀書實用のための研究であり、未だ言語そのものの研究ではなかつた。殊に俗語の研究は「俗語と雅語とを辨へざれば、古言をよみて義を取り違へる故處々に俗語を記しおくなり」といふので、雅語古言を知る助としての研究であつた點が惜しいのである。そして又「慮外とは、思ひの外といふ詞也、今江戸にて無禮の事を慮外といふは非也」と言つて、語義の變遷を認めながらもこれを規範的に評してゐるのは、亦やむを得ない事であつた。しかし、その取材考說の廣汎に亘り、而もその說き方の親切丁寧である點はどこまでも尊敬すべきものがある。

本居宣長（享保十五年―享和元年）の本領は、勿論他にあつたが、俗語にも無關心であつたのではない。例へば「玉

霰」（寛政四年刊）の「文の部」を見れば、固より雅語を說く爲ではあるが、近世の俗語のふり、、を引合ひにして、兩者を比較してゐる。吾々はこれを逆に、近世語の研究資料とも見ることが出來る。宣長は文の詞として雅言を第一としたが、漢語調と俗語とを比べては、「中々に漢文のふりならんよりは俗語ならむこそまさりたらめ」と言つてゐる。たゞ何處までも尙古的語學者であつた宣長は、近世人がよく序文の終などに使用する「ものならし」についても、

物ならしは、俗語にものであらうといふ意也、然るにみづからいひたる事をさして物であらうと、よそげにいひてよからんやは。（玉あられ、三十二枚、ウ）

と難じてゐる。曾て、小宮豐隆氏は、「芭蕉のけらし」（中央公論、第四一年、九號）を論ぜられ、その中に「ならし」にも觸れてゐられたと思ふが、宣長は芭蕉の「けらし」も、この「ならし」と同じく、「いと〳〵心得ず」と言つたに相違ない。小宮氏の纖細な論考もさることながら、この時代の「ならし」「けらし」は、最早一つの文法になりきつてゐて、語感上はともかく、意義上は、それ〴〵「なり」「けり」の類語ぐらゐに考へられてゐたことと自分は思ふ（今、これを論ずるのは岐路に入るので控へる）。又、「玉勝間」（寛政六年—）にも多少は俗言の問題に觸れてゐるし、殊に「古今集遠鏡」（寛政九年刊）の總說に於ける俗言についての論は、學說として最も注意すべきものであり、その本文の歌詞俗語譯は直ちに近世語資料としてこれ又尊重せらるべきものである。つまり、宣長は古今集の歌語を當時の俗言卽ち口語に譯するに當つて、兩者の相違を比較して考へ、俗言にも地方的差異、男女貴賤の品別、新舊の相違、彫琢の程度の一樣ならぬものがあるを言ひ、又、各品詞についてもその俗言譯を吟味して後學を敎へる所が多い。たゞ未だ俗語そのものを研究の主對象としたのでなかつた上に、宣長當時の京都語中心の標準的俗言は、語法上からは（語彙の點は

姑くおいて)、既に今日の標準口語と大きな相違がなくなつてゐたので、その俗語譯にも特に近世的色彩が著しく認められないのである。しかしながら、その今日の語法と大差ないといふ事實を示してくれたことこそ、却て國語史的に考へて意義があるとも謂はれるのである。

富士谷御杖(明和五年―文政六年)。俗語研究史から言つて、本居宣長と同じやうな列に置かれると見られる者が御杖である。殊にその著「詞葉新雅」(寛政四年刊)は、俗言から雅言を引くやうにした辭書で、著述の目的は初心の歌よみ又は連歌俳諧を試みる人の爲に、俗語からその用語を求める助となるやうにしたものであるが、その俗語が「古今集遠鏡」の俗語以上に、近世語研究に資となるものである。或は方言資料としての「詞葉新雅」といふやうなことも確かに論考の價値があると思ふ。御杖が父成章の平素の教に基づき、自己の考をも入れて俗語・古言を比較論定したものを門人が筆記したのであるが、御杖の弟、成胤の序言(おほむね)には「方言さま〴〵に違ひ、又同じき所にすむ人といへども、各いひつけたる里言もあれど、今はたゞ門人に傳へられたるまゝを載せたれば、方言にかなはぬ里言も有べし」などいひ、俗言の選定には宣長と同じやうな苦心を經驗したと見える。尤も「里言は私にあてられたるにあらず、古集どもを例としてなり」とも記してあるので、獨斷に定めた里言ではなく、その例とした「古集」も、どの程度に古いものか問題であるが、實際の語彙を見ると、近世的色調がかなり著しいと思はれる。例へば、

イチブンニ　身ひとつに。イニトモナイ　たゝまくをしき。イキセキト　いそぎて。イヅショコウニ　ひとつに。イリワリヲイフ　のぶる。イフモクダジヤ　いふもさら也

「い」の部だけからも、右のやうな例(片假名が里言)を拾ひ取ることは難くない。最後のイフモクダジヤの如きは、遊

女評判記や「難波鉦（どら）」のやうな、花街文學によくいふ成語であると思つてゐるとさうではなかつた。子孫大黒柱（寶永六年）卷一に、

禪門して道林とは付ながら、家業にせつろしく職人なせたげ

の「せつろし」は、今の辭典類に見當らず、「和訓栞」や「俚言集覽」にはあるが譯が分らない。然るに本書には、

セツロシウ　しきりに。セツロシサナシニ　ゆく〳〵と。ゆくら〳〵に。

と出てゐるので語義も知られる。尙、語法に於ては、「俳諧天爾波抄」（文化四年）がある。御杖の口授を浦井有國が筆記したもので、父成章の著した「脚結抄」の原理によつて、芭蕉の七部集中の句の手爾乎波を研究したものである。俳諧を俗文學として賤しみ、之が語法研究など思ひもよらなかつた當時の國語學界に於て、この著を見るのは、實に異數とせねばならぬ。著述の動機は、俳諧も歌連歌も元來同源のものであるから、今、兩者が反目して互に他を笑ひ、殊に俳諧者が先輩の言說を吟味せず、別に傳があるやうに言ひなすのは却て人を惑はすものである。須くこの弊を除くべしといふのであつた。俳諧は勿論俗語で、古い手爾乎波、俗の手爾乎波を混用するものであるから、俳諧によつて手爾乎波の義をさとしたならば、俳諧者流の眼を開くのみならず、この「脚結抄」を見るにも便宜があらうといふのも一つの動機であつた。そして、更に言靈論から俳諧の藝術論にも入つてゐる所が、いかにも亦御杖らしいのである。かくて、例へば「詠嘆。や、よ、な、かな、も」等の一々につき、多くの例句をあげて說くこと甚だ丹念である。（俳諧の語法研究書としては、この外に、上田秋成の「也哉抄」を始め、數種を數へることが出來るが、未だ管見に及んでゐないので省く）。なほ、「北邊隨筆」（文政二年）の「音の存亡」を記した條に、近世の音聲を數へ、これと連關して、

假名遣のことに言及し、「ぢ」と「じ」との差別・混淆について說いてゐるなど、御杖の近世語に對する留意には相當に仔細なものがあつたやうである。

宣長・御杖に注いで來た目を更に普通の國語學史上の人々に移すならば、「濁語考」（寫本、文政十年、岡本保孝の與書あり）を殘した清水濱臣（安永五年—文政七年）がある。濱臣には、勿論他に幾多の著があるけれど、「濁語考」は自然俗語に觸れてゐることが多いので、こゝに一言する。卽ち古來國語には少ないと謂はれる濁音を以て始まる語を集め、近世語に及んでゐる。「ごた〱」「ごね」（死するを云、俗言）、「ざら　ざらつぺい」「じや〱馬」などの例を、が行、ざ行、だ行、ば行にわたつて類集してゐるが、未定稿のまゝであるのが惜しい。藤井高尙（明和元年—天保十一年）もよく雅言に對して俗語を引合ひにする學者で、その著「淺瀨のしるべ」は諺の解釋書であり、「消息文例」（寬政十二年刊）では、夜前・具々・追付・取計・乍然・仔細・態々・見廻（みまひ）・難有・成程・時分・無存掛・不沙汰・氣毒などの近世の書牘用語を、それ〲中古のそれと比較して說いてゐる。この高尙に敎を受けた東條義門（天明六年—天保十四年）は語法硏究の大家であるが、特に近世語に及んでゐない。たゞ「活語雜話」の一書を瞥見しても、「給はせる」「給はせたる」「くすす」（醫）、「くする」（藥）などの考說は、證據を近世の文獻に取り、その由來する處を、近世以前の文獻に求めてゐるので、そのまゝ近世語法の史的硏究となつてゐる。この種の例は、「活語雜話」三編の諸條の中だけにも尙發見することが出來るであらう。高田與淸（天明三年—弘化四年）の著書に、「俗語考」「鄙言考」などの名が見えるのは、心にくいことであるが、自分は未だ一見に及ばない。たゞ隨筆「松屋筆記」を見ると、斷片的ではあるが、非常に多くの俗語に關する記事があり、取材範圍も廣汎で、伊勢貞丈の隨筆雜記を聯想せしめる。方言もあれば、特殊

の言語として忌詞、山言語(卷三十八の十八)などの事も見える。たゞ隨筆の常として、何の序もなく並べてあるので、索引に手がかりなく、且つあまりに斷片的なのが物足りないが、これはやむを得ない。さて普通の國語學史は、本居宣長歿後から橘守部までを第三期とするが、その第三期の最後を劃する當の、

橘守部(天明元年—嘉永二年)は、宣長一門の國語學に對して、よく獨自の見を立て、當代に異彩を放つた學者である。守部の業績は、今、「橘守部全集」十三冊に收められてゐるが、吾々は果してその中に、「俗語考」二十卷(天保十二年)の堂々たる著述を見ることが出來た。この書の內容は、今の同家の橘純一氏が全集首卷に解題してゐられる通りで、今、その要をいふと、次の如くである。

一、守部翁當時の平言。例へば「あせる」、「かまける」「こく」「細工」「才槌頭」などの語に對し近世以前の古書の用例をあげてゐる。本書にはこの類が最も多い。

二、中古以降の俗語。例へば、「ふた〳〵」「あし業」、「あく業」、「さくりもよゝとなく」、「しらます」、「くち論」等の類。

三、中古以降、守部翁當時に至る諺。例へば「瓜をこはゞ器物をまうけよ」、「くじのたふれ」、「あしなえ立つことを忘れず」の類。これ等は井澤長秀の「本朝俚諺」から採つたらしいとの事。

四、通俗な成句。「狐を馬に乘せたやう」、「髮の毛一筋ほども」、「枯木に花咲く」の類について古書の用例を擧げる。

五、俗語若くは平言を歌によんだ例。これは歌語中にある俗語・平言といふべく、「あしのうら」「まくり手」、「くだり坂」の如きを歌語として用ひた例である。

六、普通に用ひる漢語。「沙汰」、「左遷」、「大逆無道」の類の出典。

倘、著者自身の凡例に、「ひたぶるの俗語ならぬも有べけれども」といひ、「もとより俗言にさまで注すべくもあるべからねば、大かたは今の言に昔の言を引合せて」見る人の心々に任せたともいつてゐる。その「ひたぶるに俗語ならぬ」ものとは、雅語とも漢語とも考へられ、語感上純粹に俗語としがたい例もある故であらう。又「もしかゝるをさな言も、初學の人のたよりともなれらば」といつて、固より謙辭ではあらうが、著者としては「俗語考」の如きは幼稚なものと考へてゐたらしい。しかしながら、本書は、とにかく俗語そのものを研究對象としたもので、國語學者としては、流石に他の人々の手をつけない方面を狙つたものである。殊に今日いふ近世語の語源研究（用例の古きを求める意味の）上に、又その語義變遷を見る上に資する所大なるものがあらう。更に本書の立場を言へば、近世に發生したといふ意味の近世語の研究書ではなくて、古くから近世まで殘存し生活してゐる俗語の研究書である。この點が後に言ふ種彥などの研究と大いに異なる所である。從つて、その採錄語彙に吾人の目から見て近世的のものがあるにしても、それらの解說を見ると、著者はやはり古學者であると感ぜざるを得ない。近世の文獻によつて考證しようとは著者が最初から考へてゐなかつた所であるからこれは當然のことである。語によつては方處的に說いてゐるのもあるが、俗言である以上、方處に卽するのは自然のことである。或は殊更に起源を古い處に求めたと思はれるのもある。しかし又、近世の發生であらうと思ひ込んでゐた語が、案外に古く發生してゐた事實を敎へられることも少なくない。

年代から言へば、守部の「俗語考」より先にすべきであつたが、文政十三年の序のある喜多村信節（天明四年―安政三年）の著「嬉遊笑覽」は、これこそ、實に近世語研究に入つてゐる第一の書である。著者の名は「國學者傳記集成」には列してあるが、本書の名は、赤堀氏の「國語學書目解題」にも見えないのは寧ろ不思議である。或は普通の國語辭書

といふよりは百科事典的である故であらうか。本文は全部十二卷で、外に「或問」を附錄してゐるが、これは本文の追加である。最後の「浪華城菊物語」の本文全部と、「おあん物語」の抄錄こそ、附錄的の感がある。部門を分けて、居所・容儀・服飾・器用・書畫・詩歌、以下禽蟲・漁獵・草木に至るまで總べて二十八門。その中で、雜伎・宴會・商賣・歌舞・音曲の如きは、既述「世話盡」の分類を想はせ、翫弄・方術・火燭・化子(乞士)のやうな珍しい名目も見える。行遊・祭祀・佛會等は俳諧季寄の類から一轉した分類とも思はれる。娼妓の部は、同じく「戀の詞」が進化したもののやうである。しかし、それらの內容は非常に豐富なもので、決して俳書やその他の二三の既成の書によつて成されたものではない。著者は、はしがきに「わが家に昔より貯ふる物とては古き書畫器物のみ、今の身の程にはこよなう過ぎたる物ども有りし」と言ひ、「たゞ物よむ事のみ少し好みて有るに任せて見し」たとも言つてゐる。乃ち、その惠まれた平生の讀書から心づいた所を抄書(ぬきがき)しておいたものが本書となつたのである。そして、卷九の「言語」の部に、

> 詞に古今雅俗の異あり、世間の口語も亦同じ。その言語繁にして、短筆の及ぶべきにあらず、是れ、一大學問なり。今は唯女童のもてあつかふいとはし近き俗語の千萬の內、一ッ二ッを云ふになむ。おもふに口語も世のみだれし度毎に都も鄙も移りかはれることどあるべし。

と書き出し、次に貞室の「片言」、士清の「和訓栞」を引いて、一言の總論を試みてゐる。右の冒頭の一句は、「和訓栞」溯つては白石の「東雅」に立言されたことであるが、自分が、こゝに最も愉快に感ずるのは、「世間の口語」の硏究を「是れ一大學問なり」と斷じたことである。上は「諺草」の貝原好古から、下は「俗語考」の橘守部まで、自分が見て來たところでは、世話俗言の硏究に關して、何れも相當に尊敬すべき業績を示しながら、實際その從事してゐる勞作に對

しては、未だ「是れ一大學問なり」といふ自覺自信をば、誰も示してくれなかつたのである。「嬉遊笑覽」といふは、いかにも輕い名義で、この著者も、漢文の自序に「此編諧談敖弄云々」といひ、前記のはしがきにも「童のたはむれになむ似たりける」など言つてゐるが、それには別の解釋もされるので、やはり、「一大學問」といふ著者の自信があつたればこそ、この名著を成し得たことゝ思ふ。各語彙については、必ず先づ多くの文獻の用例を擧げて、後に語義を歸納してゐる。その所引の文獻は、語彙にもよるが、多く近世のものである所が本書の特色で、從つて近世語としての意義・用法を、各語について探求し得るのである。又、近世産出の語彙が多くあげられてゐるのは勿論で、これが更に本書の重要な特色である。たゞ、餘り引用に忠實であり、かつ引用を先にしてゐるので、著者自身の意見の補へがたい點があり、又全く著者の意見の示してないものがある。しかし、それもこれも研究資材としては、今日の吾々を益すること至大である。例へば、江戸の流行語をいふ條に、明和四年の「寝惚先生文集」(大田南畝作)を引用して、これに著者の見を註し、

同集に、屋船、强飲(グビノミ)、略語遊といふ句もあり。專ら言葉を略すことはやり、後世は人の心こざかしく、長々しきを嫌ふ故なり、ざれごとはともあれ、漢籍を訓むにも、道春點などに惺窩先生より傳へたる博士家の古訓も存せるを、迂遠に心得、ひたすら手爾乎波を省き讀むはいかにぞや。

と言つてゐる。江戸末期には「略語遊」といふことが行はれ、本書にも、その實例が擧げてあるが、こゝに、著者がその略語發生について一言してゐるのは、言語學に謂はゆる「容易說」と比較して面白いと思ふ。又、著者の流行語論ともいふべきは、「俳諧名物鑑」(明和八年刊、最近、稀書複製會本も出てゐる)等の卷を引いて、

當時流行詞「何らかも闇雲（やみ）介の族の祟、雨よ月よとちやらくらの夢」と有。これら今も云ふ詞なり、はやり詞は、やがて廢れるものながら、傳りて常語となるも多く、廢れたるが後にまたはやれるもあり。いづれ後世詞のに、よきはなし。云云

「これら今もいふ詞なり」以下が著者の意見である。この最後の一句に、流石に著者にも尙古趣味が働いてゐたことを見る。「うき世詞」といふ例は「娼妓」の部にある。その他の各部門、「事典」であると同時に、吾々に取つては「辭典」である。一々例示するにも及ぶまいから大略にするが、今一つ前に引用した「シンマク」について、貞丈の說を駁してゐる所だけを引いておく。

安齋云、俗語に物ごと猥ならぬやう取治るをシンマクすると云、此字詳ならず思ひしに（筆者註、こゝに、本稿の二章、十三頁に其の要を引いた安齋隨筆の文を續け記す、今、略す）……書は見るべきものと云ふは、誠にさることながら、慎莫の二字を取られたるは非なるべし。シンマクは尻卷なり。もと尻舞といふ語より轉れる詞にて物事の終りを仕舞と云ふもそのもとは尻舞なるべし。尻まひは古くいへる語なり。

といひ、尻をシンといふはシリトリの後取（シントリ）、シリガリの殿（シンガリ）の古例があることを附記してゐる。シンマクについては、「浮世風呂」の四編卷之上に、「身が重くてしんまくにおへなんだ」とある一例が、大日本國語辭典にもあげられてゐるが、その他の文獻に尙あるか。又今日は全く廢語となつたものか。これが語源も兩學者の說でよろしいか。本書から吾々に投げられてゐる問題も、この他になほ多いと思ふ。

この他に、その生歿年次から言つて精確な次第も立てられず、かつその人の本領から言つて、必ずしも學者と目されてゐない人々に、近世語に興味を持ち、尊い文獻を殘しておいてくれた者が、この前後にかなりあつたと思ふ。北

慎言、山崎美成、岡本保孝のやうな學者から、大田南畝、山東京傳、柳亭種彦、瀧澤馬琴のやうな文學戯作者で學者的のところのある人々の著書隨筆には、その目錄だけを見ても吾々の心を惹くもの（實際を見ると却て落膽させられるものもあらうが）少なくない。今、一々それらについて檢討し言及してゐる餘裕が、紙數からも、時間からも、自分の研究進度からも許されてゐない。以下十把一束的にと言つては、學者を蔑する言ひ方ではないが、自分の管見そのものが實は十把一束にも足らないので、こゝに一括して一言することにする。北愼言の「梅園日記」は、「百家說林」（六冊本、續篇上）にも收められてゐるので、近世の文學書、隨筆類などを引いて、各種の問題を捕へてゐるところにゆかしさの存することを知るが、この人の「俗語類譯」二十卷は、果してどんなものか氣にかゝつてゐるだけである。山崎美成の「世事百談」は、「百家說林」の外、最近の隨筆叢書類にも收められ最も目に觸れやすいが、その中には「俗語」「田舍詞」に關して數頁が費され、「海錄」にも流行語や各地方言に言及した處がある。しかし、この人には獨創もある（後述「瀧澤馬琴」の節參照）が、伊勢貞丈の隨筆などから、何の斷りなしにそつくり引用して、我がもの顏してゐる所もあつて、自分はおや〳〵と思はせられた（例のシンマクの語について）。岡本保孝には、「世諺問答集釋」（況齋叢書の內）があり、「難波江」にも俗語に關する一二の斷片錄がある。その他にもこの人には尙あらうと思ふ。狂歌狂文で知られてゐる大田南畝が、凡そ言語に興味をもつてゐたことは言ふまでもない話である。その著「一話一言」に「片言」を拔萃してゐることは既述の通りであるが、同書には、尙「八丈島方言通志」（？）によつて、八丈島の方言を二百語あまりあげ、又蝦夷の方言をも錄してゐる。更に「半日閑話」にも、「とんだ茶釜」「テコズル」などの流行語、或は方言をも備忘錄的ながら載せてゐる。筆まめであり、言語に對する趣味の豐富であつた南畝からは、仔細にその著書を

訪ねたならば、或はまだ近世語の研究談やその資料をば見出すことが出來るであらう。山東京傳には學的著述に「骨董集」があるが、これには言語そのものに關することはさう多くはない。唯、京傳は例の洒落本作家としての雄であるので、寧ろ「江戸詞」の研究資料提供者と言つた方がよいかも知れぬが、それでも尙かの有名な「通言總籬」(天明七年刊)の凡例に、

妹妓及雛妓少妓ノ言。其儘ヲ記。故ニ訛ヲ不レ改假名遣ヲ正ザルハ。其音ノ訛ヲ知シメンガ爲ナリ。

など言つてゐる點は、聊か語學的考慮を拂つたものと言はれよう。尤も、かういふ程度の考慮は、他の洒落本作者も拂つてゐることであり、實例をあげて讀者に彼の社會の用語を敎へようと企てゐる者もあり、又洒落本以外の、例へば三馬の滑稽本にもこの種の用意は見られるのであるから、この點からは京傳のみを然りとするわけには行かないのである。瀧澤馬琴は、その本領の讀本戲作の外に、多くの學問的の隨筆雜記を殘したが、その一つ「燕石雜志」(文化六年成)を繙いても、すぐに俗字論を試み、「關東方言」を說いてゐるのが目に留まる。又「兎園小說」は、馬琴はじめ山崎美成以下、屋代弘賢なども交り、都合十二人の同好者が、毎月會合しては奇事異聞を語り合つたものを記錄編輯したものであるが、近世語に關しては山崎美成の「隱語論」が載つてゐる。(因みに、本講座の菊澤氏の「國語位相論」に、この隱語のことも論ぜられてゐるが、「馬琴の兎園小說」といふ風にのみ引いてゐられるのは、或は讀者の誤解を招きはしないかと思ふ。この書の「隱語」の說は、好問堂卽ち山崎美成の研究で、馬琴の說ではない)。尙、馬琴は假名の用法や句讀法についても、彼一流のやかましい考を持つてゐたらしく(「朝夷巡島記」、第二編卷之一はしがき)、それは、やがて當時の假名づかひ、表記法とも關係して來ることで、一つの研究問題になるが、こゝには例示するこ

とを省いておく。

最後に柳亭種彦（天明三年－天保十三年）であるが、その生歿の年次からは、もつと早く言ふべき所を、說述の都合で後まはしにしたのである。戲作の草雙紙で大いに名をあげた種彦は、おそろしく考證ずきの眞面目な博識の學者的一面を備へてゐた。特に近世語彙研究に忠實であつたことは、「嬉遊笑覧」の著者に比して勝るとも劣るまじく、その一々の引用書には悉く刊記を註してゐる如き、どこまでも學問的に用意周到である。そして又その引用書が頗る廣汎に亘り、而もそれが殆ど近世にものされた文獻であるので、この點も「嬉遊笑覧」よりは更に近世的特色が存するのである。卽ち、その著、「足薪翁記」三卷、「柳亭記」二卷、「柳亭筆記」四卷、は何れも「百家說林」（六冊本の續篇下一）に收められてゐるので、何人にも利用せられる。この外に、「柳亭遺稿」（續燕石十種第二所收）「柳亭雜記」四卷（寫本、松井簡治博士所藏）もあるが、何れ、隨筆であるので、前記三者とも記事の重複があるやうである。「返魂紙料」（百家說林、續上）と「用捨箱」（有朋堂文庫所收）も、種彦の著として名高いが、この二著には別に圖錄的特色が存するので、言語に關する研究を見るには前記三・四者に越したことはない。

一、とりんばう（「ばう」といふ考種々）。奴詞。愚なる者の異名。

二、双六の詞。よこざんといふ流言（筆者註、流行語のこと）。

三、女の髮の名くさぐ〵。やくといふ詞。

一は「足薪翁記」、二は「柳亭記」、三は「柳亭筆記」に、それぐ〵見える項目で、自分が單にノートしておいたものを記したのであるが、これらに限らず、その用例をあげることが甚だ多く、誠に著者の丹念には驚かされる。固より、そ

の全體の分量の多いことや、分類などの整つてゐる點では、隨筆的なこの書が「嬉遊笑覽」に及ぶべくもないが、部分的に見るとこの書の方に委しいものがあるのである。

この種彥の影響を受けること甚だ強く、偏に右の諸書に隨從しようとして著されたといふ書に、尾州藩の學者小寺玉晁(明治十一年歿)の「難廼爲可話」(五卷)がある。帝國圖書館に、著者自筆本のあるのを謄寫したものが、この頃三田村鳶魚氏の「未刊隨筆百種」(廿三)に收められた。自分も大いにその便益を受けてゐる一人である(殊に未刊隨筆本は索引があるので有りがたい)が、試みに「私雨」といふ語を引くと、

有馬山私雨のふるよりも湯女にふらるゝ身こそつらけれ　正房

有馬山私雨に松茸の笠をひらひてさし出にけり　宣由

といふ二首が「有馬大鑑迎湯抄」から引かれ、

秘藏する筆は湯治のつとならし　暫醉

わたくし雨に柿ぞ色つく　季吟

といふ附合句が、「季吟集」(萬治三年)から引かれてゐる。筆のこともあるので、これも有馬のことゝ思はれるが、いま、これを引いたのは本書の引用書の一例を示さうが爲である。(「私雨」については、曾て「方言」の創刊號に、新村先生が書かれた論文を拜見したが、この二書の例は見えなかつたやうである)。とにかく本書には、かくの如く俳書・假名草子・浮世草子・狂歌集・地理書の類に亙つて、百五十五種ほどの書が引用されてゐる。そして一語彙の用例をいくつも擧げてをり、更に丹念なことには、さう多くはないが、「野良關相撲」(元祿六年印本)や「繪入庭訓往來」(貞享

五年印本)や、「繪本和泉川」(寛保二年印本)や、その他、西鶴ものなどの挿畫から採つた繪を挿入してゐる點まで、いかにも種彦式であつて、これ又、近世語研究材料たる價値を、十分にもつてゐるものと思ふ。尙、雀庵(加藤昶)の「さへづり草」(寫本二百三十七卷、天保—文久。帝國圖書館藏)は、高田與淸の「松屋筆記」を想はせるもので、それより、更に委しく俗語流言に關することも相當に多く記されてゐる。その一例に、オツコチ(落ちる)といふ流言についての說が自分の興を惹いた。「落ちる」を何故「オツコチル」といふかについては、嘗て東條操氏に質問されたことがあるが、浮世風呂にも、この「オツコチ」が出て來る。或は、「オチル—オツコチル」は、例の「挾詞(ハサミコトバ)」が一般に使はれるやうになつたものであらうか。それならば、西洋輸入の言語學說では俄には間に合はない。尤も「さへづり草」には、その語構成論は記されてはゐないが、近世語研究上注目すべき一書たることを最後に附言したわけである。

結言

以上で、甚だ未熟ながら自分は本稿の筆を擱かねばならなくなつたが、なほ一言すべきは、俳人の著書は、一先づ「世話盡」で打切つておいたけれども、尙、他に探れば國語學史から見ておもしろいものがあらうといふことである。その中、最も珍重されてゐるのは、越谷吾山の「物類稱呼」(安永四年刊)である。「雅言俗言翌檜(あすならう)」(安永八年刊)も、同人の著であるが、この方は辭書的とはいふものの、俳人の爲にした特色を失はないだけ、國語學書としての評價に於ては前者に到底及ばない。前者は殊に方言辭書として、最近殊に名高くなつたので、本講座でも多分その方の學者が言及されるであらうし、若し又さなくとも、すでに「日本古典全集」第四期本に、「片言」などと共に收められ、東條操

氏の委しい解題も添へてあるので、拙稿には殊更に省いた。又、近世語を多く採錄した辭書としては、有名な「俚言集覽」がある。從來、村田了阿の編とのみされて來た本書は、近來はその編者が怪しまれて來て、學者の間に問題とされてゐるが、ともかくも今日は活字本になつて流布されてゐるので、こゝには省いておく。但し、その「增補俚言集覽」の方は、語彙の增補されてゐることは勿論だが、語の排列も原著とは異なつてゐる。著者自筆の稿本といふのが、帝國圖書館に藏されてゐるのを見ると、五十音順ではありながら、アカサタナハマヤラワといふ如く橫の順にし、縱の順に排列されてゐないのが目につく。特殊辭典としては、明治の末に近く、藤井乙男先生の「諺語大辭典」が現はれ、又、辭典ではないが、同先生の明治三十八年に著された「俗諺論」は、昭和四年に「諺の研究」として、內容も改訂されて出てゐる。同書には附錄として「毛吹草」及び「世話盡」の諺の部が載せられ、「世話詞渡世雀」その他も收錄されてゐる。宮武外骨氏には「川柳語彙」や「アリンス國辭彙」の著があり、ともに川柳用語の研究書と見られる。上田萬年博士樋口慶千代氏共撰の「近松語彙」が、斯界に於ける大きな存在であること亦言ふまでもあるまい。

終に臨んで更に思ふ。以上拙稿に記したことは、固より脫漏多く、偶〻言及したことも極めて杜撰であるが、主として語彙の硏究に關することであつた。近世語法に關しては特殊問題を捕へての硏究は多少現はれて來たにしても、未だ一貫語法の硏究にまとまつたものは出てゐないと斷言できよう。この事實は、卽ち我が近世語史硏究の前途の多事なること、多難なること、而も亦多望なることを語つてゐるものと自分は解するのである。（八・九・四、脫稿。）

昭和八年十月七日印刷
昭和八年十月十五日發行

國語科學講座
（第四回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者　株式會社　明治書院
代表者　三樹退三

東京市神田區三崎町三丁目八十九番地
印刷者　細谷祐三

發行所　東京市神田錦町一丁目　株式會社　明治書院